

「法華から其の御門徒を亡ぼさうといつて遣はした間諜で、まづお世つぎの新發意殿を吸殺さうといふ恐しいことだ。」

「へい。」といつて分らず、いうやうに答へて頓興な顔で居る。

七歳の龍女さ、なあ、婆さん。」

「まづ、串戯ではないよ。」と上人は案外笑ふ者をたしなめて、  
「全く人の實ぢやよ。こけぢや、たはけぢやなぞと申すけれど、伶俐なものに出来ようか。汝の志、あまり難有さに私も貰ひ涙を溢した。あゝ、誰も察してをる、お米の心は何んなであらう、新發意殿は亂脈ぢや。したかな、年少なあのおとなしいものに些少も罪はないよ、皆女めがする仕業ぢや。美しう見えても彼は鬼ぢや、魔ぢやての、新發意の體に分入つて臟腑を嚼る奴ぢや。」

「まづ、串戯ではないよ。」と上人は案外笑ふ者をたしなめて、

「まあ、あなた、馬鹿々々しいではござりませんか。わけは分らずこけの一念で恐しいもので、既でにほんものになりかけたのでござりますよ。まあ、ほゝゝゝ。」と陽氣に笑ひ出した。

「何か、感心ぢやの、作藏、残らず聞いたよ。」

「はい、はい。」

「おや、あなた。」と婆さんは莞爾々々する。作藏は手をついて、きよとくく眼で、

垣で眺れた執事の恐瀧である。

「いや、私ぢや、私ぢや。」

「はい、」

「何うした。」

十七

仰いで見た作藏と、振向く女中頭の眞中へ、ゆつたり幅廣う薄白い姿で立つたのは、さきに袖

「其は、それはまあ、おやゝゝ其はまあ。」

さらけだした、ありたけに、女中頭は些不意打をくらつてまごつき、

ねえお前様、こんな時留めるにやあたねえだ。」

「命まで棄てさつせえた、お米様の前に對しても、俺あ口惜しくツて、何とすることも出来ねえだ。法然頭アぶちのめすでもねえ。お執事様もござらつしやるに、俺が出しやばつて意見のうすべいやうはなし、今頃は何んな心持のしてござらつしやるか、冥途のお米様あ、俺可愛のうてなんねえで、はい、めちやくちやに押死ぬべい。死んでお目にかゝりや、どんなお顔色だか見られるでがせう。やたらに縋りついて眼を塞いだら何うかなることぢや。活効のねえ娑婆に居るよりか増でがすからね。俺あもう何ちうても留まらねえだよ。何も寒いかともいつてくれた事のねえお前様、こんな時留めるにやあたねえだ。」



なか／＼分別のある悪黨は此方にもこたへがあるで、さきからも手出しが出来ぬわ。新發意殿は一向な若様、何も御存じない、よいお兒ぢや。少しも悪氣のないものには、魔がさし易いで、拇のさきから體に分入るとしてある。おとなしいものをいぢめるで、猶憎いわ、なう作藏。」

「はい、」といったきり拳を握つて、作藏は頭を垂れて染々聞いて居た。上人は下唇をなめて、處でぢやが、まあ、作藏かうぢや、よく聞きな。小兒が病に苦むのを可哀うて見て居られぬというて、遁げ出す親があつてなるか。其の苦むのがたまらぬというて、親が首を釣つて何になる、何うするよ。病なら何處までも治してやらねばなるまい。

また金魚を取りに来る颯が居たら、飼うて置く者が水の中へ入つて身を投げてなるものか。其颯を殺さず我身が死んだのは、お米殿心得違ひぢやて、何にもならぬわ。腹を立てるなよ、作藏、汝それほどに思ふけれど、犬死ぢやつたよ。それ、矢張新發意はあの通りで、颯めに狙はれてござるでないか。分別のあるものは、何もむづかしい事はない、其の獸を打殺すぢや。あひ手の悪蟲さへ取つて退ければ、おこりが落ちると同一で、お新發意の身持は治るて。悪魔が又那あ見えても女に化けただけの通力ぢや、棒でくらはせば些少めかたのある颯より脆いよ、なあ、作藏分つたらう。」

身を震はして、

「ありがたうござります、と云つてべつたり地に額をつけた。

「もし、」と女中頭も安からぬ眼で、作藏の様子と、忍海の顔とを見較べながら、沈んだ調子でいつた。

「ぐんづらもの事出来し、恐うございますよ、ほんとうにあの女を。」

「いや、お婆、黙つて居らう。」

「だつてもう奥様がお折れ遊ばした上は、…何もあなた。」と擦寄つて低聲でいふと、忍海は、一面にくもつて来た空を見ながら、

「此の陽氣ではまだ何うして、なか／＼針の毛裘を脱がぬからよ。」

十八

「あなたほんとうに背いて下さいますか。」と主殿之助は、新發意の居室なる唐机に片膝凭れて、籠洋燈の灯影に顔の色美しく、細い襟脚白々と、藤紫の紋着艶やかに、友染の綿の厚い大きな座蒲團の上に据ゑられながら、斜めに見た。

新發意は其の傍なる瓶掛の傍に、片足折曲げて、居坐行儀悪く、片膝を立てながら、これは直に壘の上、鐵瓶のつるに手をかけて、火箸で切炭を突きながら、



「背くさ、何でもいつて御覽。此中でどれでも一ツ、皆大事なのぢやから、どれも、これもとい  
うてはいかんよ。」といひかけて、ふツふと鐵瓶の下を吹く。

横にいろ／＼なものが並んで居る、桐の箱に眞田紐十文字にかけたものあり、袱紗に包んだもの  
あり、臺に乗せた小さな木像もあるし、きら／＼と光る玉もある。水晶で刻んだ可愛らしい鼠  
も居る、うつくしく並べたあたりは、何となく床しい薫がする。

「皆、寶物なの、これね、これね、それからね、これ。可いだらう。これはね、殿様から拜領し  
た陣羽織の切ださ。蜀江の錦といふの。これは、あの、いまにお前のと二個、煙草入を拵へる  
つもりなのだから、いまねだりツこなしさ。どれでも欲しいものをさうおいひ。一ツだけなら何で  
も可いや、この鼠は何うだい。」

女はつまさぐつてた筆を其まゝ、頬にあてて傾いた。

「いゝえ。」

「ぢやあこれにおし、立派で可い。」と袱紗を開いて、片端をあげると、見事な珊瑚の八分珠。女  
は顔を差出して、

「まあ、可いんですねえ。」といったが、机にかけてる片手を出して取らうともしなかつた。新發  
意は小指のさきで、珊瑚の上をはじいて見て、

「可いぢやあないか、これが可いよ、女には一番用に立つて可いよ。」

「でも、私やそんなもの欲くはないもの。」と向直つて、机の上に一枚開いた白紙に臨んだ。

「おや、綺麗な卦算だこと。」

新發意は瓶掛越に、鐵瓶の上へ顔を出して、

「そりや可い、そりや、黄金象嵌がしてあるさ、それを上げようか。」

「いゝえ。」といつて筆をかへし、軸で紙の上をニツ三ツ叩いて居る。

新發意の拍子抜けした顔は、瓶掛の下へ下りて、火を覗いた。

「ぢやあ分らないや、何にも欲くはないんぢやないか。」

「いゝえ、あるの、欲しいものがあるの。」と甘えるやうにいつて、ぴつたり机の上に片頬をあてた。

「だつて下さらないと、私はいひ出してから口惜いものを。」

「なんののかのとむづかしくいふなら止すさ。」

「だつてあなた、約束をしたぢやアありませんか。奥様に廊下で出つくはした時は、殺されるか  
と思ひましたよ。」

「私だつて吃驚したけれど、何、何にも母様はお構ひでないから可いや。」



「それだつたつて、」

「ぢやから、誰もやらぬとは言やせぬといふに。」

「其では、いひませうか。」

「む、」といった新發意は、かやうに重んじていひ出すものの、いかに貴重なるかを豫め思ひ料つて、易からず危む色である。

十九

主殿之助は居坐を直した。

「三位さん、お寺に、あのね、」

「む、」

「あの、御山の瀧の上へ蓮如様の十五丈ある大きな銅像を立てるんだつて、其の見本に、六慶といふ彫刻師に一昨年おあつらへなすつて出来た、お腹籠の一寸五分の御像があるでせう。」と言正しくきつぱりといふ。新發意は女のあらたまつて、凛とした眼をうっかり瞻つて、

「あるさ、」

「さう、」

「あるが何うしたの。」

「あれを下さいましな。」

「何、あれをくれ、あれかい、あれは、些困つたなあ。」

「だつて黄金でも、銀でもないぢやアありませんか。そして何も下さいたつて貰つ切にしますのぢやないの。此間ツから幾度も私の母様が其事をねえ、お寺へお願に出ましたから、お聞き遊ばしたでせうと思ひますが。」

「何かい、夢を見たつて、」

「あの、私の父上はねえ、お亡なんなさる時、こんな商賣をさして濟まないつて、紫の袈裟をかけた、うつくしい坊さんにおんななすつて、夢枕に立つておわびをなすつた位ですもの。魂が活きて在らつしやるに違ひないんです。さうしてあのお像は大層心配をしておこしらへなすつたんですから、念が籠つて居ますんですわ。」

「ですから、このあひだ母様が夢を見たの、あなた聞いたでせう。」

「あ、あのお像の左の眼が傷んだつて、」

「それで、直してくれとさういつて見えなくおんななすつたんですツさ。他に頼む人はないのですけれど、大事なお弟子で、菊地讚平つて、よく、あの、父上の手を飲込んで居るのがあります



から、治させようと思つて、母様がわけをいつて、幾度か知らお寺にお願に参つたさうですけれど、お執事さんは、あの（其はこしらへたものは職人、六慶が製したものにせい、一旦お寺の寶藏へをさまつた上は、俗のものの手に觸れることは置き、近く寄つていきをかけるさへ恐れ多い、勿體ない、そんなたやすいものではない。見る、内のお上人様にだとして、奥様にだとして、人毎にお眼通が叶ふものか。）とおつしやつて、何んなに申しても肯いちゃあ下さいませんツて、狂氣のやうに騒いでをりますの。私はあなたに御最眞になりますから、他におたより申す處はございせん、ちやうど幸でお願ひ申すのでございませぬからねえ、あなた、それほどの物を、損じさすの、失くするのツてことは、怪我にもないだらうぢやあございませぬか。大方母様は私の返事を今夜は寝ないで待つてませうから、後生ですから、しばらくそつと貸して下さいませぬ。あなた、とすつと寄つて軽く膝に手をかけたが、其ま、ツト退いてまた机に凭つた。これほどの新發意が、それには困じ果ては形で手を拱いて、黙つてしよげて、いまでも乗つてと思ふ女の手が、フト見ると膝の上に失くなつてたので、怒らしたか南無三と、あわてて眼をあげて見ると、うつむいて何か筆を染めて考へて居た。

「おい、」

「……………」黙つて居る。

「ちよいと。」

「可ござんすよ、もう、あなたは。」とツンとして向うむきになつた。うしろへにじり寄つてツツと覗くと、むかし某樓の全盛を極めたおいらんで、いま其の廓のお針をじて居る、お家流の上手なのに、いろはを書いて貰つて、間も、隙も、手習をするといふ、袖はすなほに紙の上へ、かなへてくださいまし、——と平假名で書いた。

二十

「まだ可いよ、可いぢやあないか。折角の頼みぢやから、御像を貸したやうなもの、お前其れを取ると直ぐ歸るといふのは、餘り薄情ぢや、もう些少遊んでおいでよ。」

「はい。」

「ねえ。」

「だつて明るくなりますと、歸られませぬもの。お寺の前は疾くから人通が大變です。」

「裏から出るさ、裏からゆべ入つたやうに。」と新發意は熱心にいつて摺寄つた。袖は受身になつて持ち扱つて、

「夜か明けましてから、あの田畝の川を、一人で爪立つて歩行けますか。」



新發意は生真面目なもので、

「渉られるさ、足許が確で可いや。」

「まあ、考へて御覽なさいな。あなたさうした日にやあ、宛然三の坂の狐につまゝれたやうぢやありませんか。」

と女は莞爾餘儀なさうに笑つて見せた。

「あゝ、さうか、はゝゝゝ」と何の力も無いやうに、ぐツたり瓶掛の前に胡坐かきながら眼を上げて見ると、幽に東雲のあかりがさして、障子は薄くをかしな狐色になつて居た。覗くやうにすると敷設けてある夜具の、黒い天鵞絨の襟にも白々とほこりがかゝつて、籠洋燈の灯も黄味を帯びて、ぼんやり並べ立てた寶物も、すべて欠伸をしさうな形。灰も、炭も皆すべて色が褪せた座はぼやけて居る。

「かうなると直ぐですから、ね、歸りますよ、よ。」と膝を立てさうにして女は急き立つ。新發意は懐からものを抜かれた風で、

「ぢやあ、歸るさ。」

「はい。」

「餘り現金だねえ、歸るといふと直ぐさう喜ぶのだから、嫌だ、歸しやしない。」立ちかけた女の前へ横すりにすつて寄つた、新發意は膝に手をついてきつと極つた。慥愛のない顔をおつと見て、

「それぢやあ歸りません。可いやうになさいましたな。」とツンとした趣でキチンと坐り直つたが、少しひぞつて横を向いた。片頬にうつくしく鬢の毛がもつれて影が映る。心淋しい、樂まない姿を見て、新發意は大にしよげ、

「歸すよ、お歸りよ。だがねえ、」

新發意はあたりを見て、鼠色になつてぼんやり立つ屏風の一所に眼を留めて、

「あれは何だい、さあ、いつて御覽、え、いつて御覽よ、あれを知らないぢやあ歸さないからいい。」と尋ねたのは、屏風の畫で、薄墨の浮上つたやうな羽色、白い腹、五六羽重なりあつた稻雀。厚い三角形の嘴に、一ツづ、黄色を帯びたのが籠洋燈のあたりで見えた。

「あれですか、」といった時、女はやさしい顔をした。新發意は嬉しさうに、

「あゝ、何だよ。」

「あれはね、あの、……」と横を向いて、紙の薄い、障子の方を見返つたが、急に傾いて新發意の肩に頬をあてて、

「いま鳴きました、」とあどけなく嬉しさうにいつた顔は、細面で、ぱつちりとした目を少し細め、



醫を見せたが得もいはれずあでやかなものである。

「お歸り。」

「はい、」といふをきつかけに、ツト立つて離れたやうに新發意と分れて出る。

上から、

「御像は氣をつけるんだよ。」

下から、

「生命がけですものを、」と上を向いた、あざやかな一雙の眉は、暗い階子段の中途で見えなくなつた。

二十一

女の姿が、二枚の障子を一枚あけた臺所の前にあらはれた時、眞赤に焚火が映つて黒ずんで判然見える、ト竈の前に蹲んで、一人片手で顔を支へて眠さうな、片手で耳のあたりに鐵火箸の長いのを持つて居る、眼尻の垂れた大な顔に、べにのやうになつて炎が映つて、どつしりした大釜の下でちよろ／＼と煽つて居た。

はッとためらつたが通らねばならず、あけてある障子の透間の、暗い所へ斜に半身を出した、片足眞赤な障子の前になる、トタンに振向きもせず、其の踵を支へたまゝ、其の鐵火箸をもつたまゝ、くちのさきをむぐ／＼とやつて、

「通ちゃん、お精が出ますね。」と萬事心得て聲をかけた、これは忍海のとりまきで能く見しつて居る納所である。

「はい、」といつて顔を背けたが、汗びつしより。女はちよいと立停つたが其まゝ、焚火の蔭から、矢がそれたやうにフイと消える。

二十二

「奥様、もし奥様。」

ちやうど細目にあけた襖の合目から横顔を纒かに見せて、長い廊下を見送つた夫人は、女が藤紫の紋着の袖の端の、一ゆり揺れたのを、焚火の蔭から見失つて、ホツと呼吸をついた時、呼ばれたので其の毗を返した。

敷居の外に手をついたのは、女中頭の姿である。

おうやうに黙つて瞰下すと、眼をあげて姿は額越に色をうかゞひ、

「奥様、御前様がお召でござります、あなた夜があげましてもおいで遊ばしませぬと、御車法で



「ござりますよ。」といった。さし置いた雪洞は光を失つて居る。

いふうちにハヤ手のさが襖にかゝつたが、聞き果てるや否や、逆にすらりとあけて、フランネルの寝衣、巻つけ帯、ありのまゝなる夫人の姿は、右の爪さきから悠然として廊下へ出た。

吃驚、けとついたやうに身を起して、雪洞を上げた婆は、二三歩後ずさりになつたが、前途を開いて片側からさきに立つと、ためらはないで静々といつて行かる。

うしろから早足で、いま居間の中から生れたやうに出て来た、色のあざやかな着附の腰元は、する／＼と追ひ絶つて、うしろからすつしりと羽織らせた。

梅鉢三紋の判然した黒縮緬の羽織に柔かに手を通し、片袖を落した手を懐にして、左の白魚のやうな指のさきで引合はせた襟をおさへながら、屹として前に進む。

「此方へ」といつて見返つた時、婆は表二階の段階子に、二三段踏みかけて居た。夫人は段階子の附階で、半身を捻ぢた、すらりとした櫛巻の、襟の深い後姿で、斜めに二階を透かしたが、やゝあつて活潑に白い足を踏みかけると、うつむいて少しよろめくやうに、琵琶を立てて上つた。

襖を左右にあけて導く。後からついて来た腰元は、こちらむいてあとを閉めて向直ると、ハヤ一室向うの別の襖が遙かに開いて、夫人のすつと入つて行くうしろを見た。

あとをまた閉める、さきをまた開ける、三室過ぎて次の襖の際で、婆は膝を折つて、手をついて、心して静かに開けた時、薫が高い香の匂、ぱつと面を打つたので、夫人は立停まつたが、片手を懐にしたなりで立ちながら、キツとすかして見る。下なる疊が波に引かれて、おのづから歩くともなしに動くやう、夫人は一文字にすら／＼と通つて、さし控へて居た腰元が膝でにじり出で、はらりと友染の座蒲團を直した上へ、夫人は、見向きもせず乗つてすつと立つたが、半身恰も沈んで行く如くに見えて、しとやかに座についた。

眼のさきに碁盤を控へた白は五位で、黒は忍海上人である。二人ともおつと盤面を望んで、いま坐つた夫人には眼もかけない。

盤の上には、入亂れた黒白の石が斷續して、一夜に湧いた島のやうに並んで居る。夜通し圍んで居るのであらう、疊を帯びて玉ぼやの臺ランプがまだについたまゝ。夫人は坐ると齊しく黒白いつれにも目をくれず、眞中の盤の中心に瞳を注いで、しばらく眉も動かさなかつたが、わき目もふらないで其まゝ、

「火鉢をおくれな、寒いから」と無造作にしつかりいつた。



や、あつて腰元が夫人の傍に火桶を据ゑた時、黒石の忍海上人は膝に構へて居た手を逆に疊についで、仰向いた鼻で此方を見た眼は、夫人の天窗を越して、差控へて居る三人の女中に注ぎ、「皆お次へ。」と云つてまた盤面を睨む。

聲に應じて、女どもは皆あとあきに通つて隣室へ遠慮する。

「劫ぢやな、は、は、は、と五位はさびた聲で鷹揚にいつたが、すぐ黙つて座はまた森とした。

夫人はしつとりと垂れかゝる羽織の袖を、手あぶりの縁にかけた手に力が入つて、思はずしかと押へながら、正しく坐して片手を胸に置いたまゝ、眼まじろぎもしないで黒と白との真中を見詰めて居たが、

「明るくなつた」と呟くと其まゝ、何と思はれたかすつと立つて居處を替へ、忍海の背から基盤の向うへ出て、くるりと背後向くと窓の障子を颯と開いて、あけがたの境内に面を向ける、卜朝風が冷たくやゝつむりにこたへるやうに重く入つて、一煽をくれて灯を消した、玉ぼやは白くなつた。

「お、せいゝする。」と夫人は俯向いて外を視める。小窓は外からは眼につかない、通からは見えないやうに隠して拵へた二階なのである。

梅の梢にならびたつた、いかめしい表門は、濡色を帯びてまだ閉つたまゝで、およそ二百坪に

餘る境内一面薄げと音を被つて靄んで居る。眞直に流れて引狀に一筋、斜めに鐘樓へ一筋、敷石が敷いてある。其の傍をしらゝあけに唯一人、廣い處をのそゝと歩行いて居る、尻端折の男は作藏である。

作藏は、腕組をして俯むいた袖の下に、握太な棒をかくして、一心に地を見ながら、指す方もなく歩を運ぶ。ちやうど爪さきを放れた處を、石が動くやうにのそゝと行くのは、一匹の墓で、門の方を指して殆ど規律正しくといつてもいい、一定の距離を一ツ一ツ這うて進むのを、傍目も觸らず視詰めながら、墓が一步出れば、親仁も一步、足をあげて踏むでもなく、立停まつて遣過すでもなく、境内を斜かひに、敷石を横ぎつて、凡そ人のあるくのに最も緩慢な足の運びで、やしばらくついで行く。

門際にも到らず引返して、墓はまた横の方鐘樓の方へ動き出した。

同時に向をかへて親仁はまたあとについたが、組んだ腕を解かうともせず、隠した棒のさきをださうともしない。式の如き愚直ものの、大方墓は一種の通力を持つて居て、うかと人手にはかからぬものである事を固く信じ、一舉手にして儘し得べく眼には見て取らるゝほど、實際容易なものではないと、自から重んじて居るのであらう。

かはらず何處までも墓の行く方へ少し離れてついて来る。ハヤ明け放れたほどであるから、爪



さきを這ふ蓋は捉ふべき影もない。蟲の天窓と直角に、反つた唇を突出して、のつぺりとした顔に、眼も鼻もない異形な親仁の小さな身體は、次第々に位置を轉じて、松が一二本、梅の樹が四本で包んだ中から堆い瓦屋根のあらはるゝ、朱塗の柵をまはした高くない鐘樓の蔭へ、いつのまにか入つて見えなくなつた時、二棟に分れた本堂と、くりやとの間こゝにも敷石の通つて居る細い路地の間から、袂を胸にかきあはせた薄紫の紋着、細りとした小造な姿で、これも頭を垂れながら急足に出て、一重薄葉につゝ、まれた籬の如く、靄のむらゝと立つなかへ、濡れたやうになつて出たのは主殿之助に扮した女である。

二十四

急に廣場へ出てあかるくなつたのを、女は驚いてフツとさめたやうに目を睜つた。鐘樓の暗いあたり、屋根瓦の庇の間、其處ともなく中空に數知れず、一團、一團、雀の聲。遙かに聞えて所に鳴残る蛙の鳴音は、恰も大軍が山手を指して次第に引上ぐるやうである。

女は何か心着いて、つか／＼と本堂の前へ行つて、チヨイと片手拜をしたが、心忙しさうに急いで敷石を眞直に傳はつた。

此の敷石を挟んで、左に七本、右に六本、いづれも老樹の根が植わつて居る。一葉も枯れず繁り合つた半あたりで、其の姿がかくれたトタンに、一巡り巡つて鐘樓の此方から作藏がのそりと出た。が、さきとおなじやうな足取で、何かものおもひをしてる風、のそ／＼門の方へ境内を斜に過つて行く、ト女は櫻の中から出て、うしろへ小戻をして、裏越にむかうを透かして見た。作藏が身體は扉に並んで立停まつたが、門をあけようとはしないで、やゝあるとまた引返して、女の居る方へ例のあるきぶりで寄つて来る。

近づいた時、目をそらして女はあらぬ方を見ながら、櫻の根をくゞつて、作藏をはづして地上へ出たが、極めて落着いて、澄ました風情。しきり鳴く雀の聲の、鐘樓の空の方をながめてイむ。

傍をあるいて作藏はまるで見ないやうな様で、敷石の上を本堂の方へ、女のうしろを通り過ぎた。と思ふと、フト突戻されたやうにくるりと身を蹴して、横ざまにじり／＼と進み寄るので、一所に推放された如く女はあるき出して、また門の方へ行かうとする。

背後へ少し急につか／＼と寄つて近づいたから、女は遣過ごさうとでも思つたか、其まゝ、立停まつた。

作藏も同時にあるき止んだが、また思ひ出したやうに傍を通つて、離れて前へ出た時、振返つてはじめて女を見て、目を合はした。



式の如き醜怪な顔の色も、知らず何かもの易からぬ趣で、一際凄く思はれる、女は再び面を背けた。

作藏は足踏をして横ざまに左へあるき出した、女はそれて右へ横ざまに又動いた。作藏は縦になつて女のあとをつけようとすると、女は向をかへた。かやうにすることあまた、びで、果がな

い。門の戸はあけないから出るにも出られず、内へ引返す分ではないので、女は心づかひに疲れた状で、しばらく葉櫻のかげに立煩うて動かなくなる。

右に出で、左にまはり、ずつとうしろにもなり、前にまほりもして、作藏はつかず、また放れず、しかも何等か狙ふ的のあるかのやう、じり、じりと歩を運ぶ。

狙はれるのは我身であることを察するに難からぬ的に立つて、女はといきをつき、といきをつき、胸を轟かすつ次第に呼吸忙しく、引詰められ、おつかふせられるやうになつて立窘む。

周囲をまはつて直に、斜に、あるくに角を立てて取廻した、恰も真中へ獲物を措いて、この境内一杯に蜘蛛の巣をあやつるやうである。

女はそれともなくおのづから手足を縮めて、いきつきあへず固くなる。

二十五

思はずト胸をついて、しかと眩をついた。夫人は、二階で驚破と見らるゝトタンに、悲鳴を擧げて、

「あれ」といった。女の身は弓形にそつて、重ねた細い襟を驚擧にされたが、目をうつとりとのけざまに反つて白い踵を揃へた。身體は土を離れる、ト悶えて、釣り下げられながら裳で地を摺つて、斜めにするゝと引摺られた、背が横ざまにあたつて松の梢がゆらゝとしたが、其ま、鐘樓の蔭になつた。風一陣、葉櫻の梢は皆ざらゝと震ふと同時に、

「あッ」と聞えた裂いたやうな苦痛の聲、染色が風に散つたやうに、紫の着物はひらゝと亂れ亂れて矢のやうに駈け出したが、しめつた苔に踏込つて、膝を揃へると真直にのび、うつむけにはたと僵れたが、やがて匆ね上るやうに起きた。咄嗟の間に、またばつたりと僵れる時、七株植つた櫻の木、真先に一本、三尺ばかりでまほり太で、くの字形の、おなじ樹の切株があるのに、両手を絶り、しつかりと胸に抱へ占めて、片頬を埋むばかりひつたりと切口へおしあてて、がツくり仰向いた髪は流るゝやうに颯と解け、肩に餘つてばつさりとし地に落ちた。

女は眼を瞑つて可愛い口を眞四角に小さくあげた。得堪へないやうに唇を弛めたが、見るゝ薄



りと蒼味を帯びる額際へ、横に前髪の亂れた中に、にじんで、紅の見えたのは、口紅が散つた色ではない。其膝、其手、其胸に搦んでもれた長襦袢の色の、それでもない。

「あ」とばかり眩を落して立たうとした、領を無手とうしろから壓へられ、心激して、力を籠めて振向いたはずみに、鬢にさした櫛があたりと落ちる。屹と瞳を据ゑて見合したのは、嫁いで五年、生れて二十三年、かほど近々と面を合せたのは今がはじめての良人五位の佛造つた顔である。夫人は蒼くなつて、言急に、

「あなた！」と一聲、たゞこれだけを云つた。

五位は、でッぷりとした頬をゆた／＼と片頬笑して、

「奥、もそつと能く見い、能く見い、よく見るのぢや。」といひながら、冷たくなつた頬に手をかけそへて、残酷にも下なる女に突向けた。ともすれば亂れかゝる膝を合して、紫の下に紅の襦袢のちら／＼とわな／＼と斷末魔の衣の皺は、波打つやうにきら／＼として見えた。

「可い加減になされい、あまり強情をお張りなさると、末始終いゝことはござらぬぢや。讚平などといふ、餓鬼を慕ふ女はあのだまで寂滅でござるからな。」と獨言のやうにいひながら、忍海はのびあがつて一寸見て、ざくりと碁笥の石を掴んだ。

ちやうど此の時棒を提げて、さまでには急ぎもしないで、鐘樓から作藏は出て來たが、のさの

さと近づいて、其の醜怪な顔を上から正おもてに向けると、女はうつゝのやうに細い手を上げて、五の指を動かしたが、苦とまた叫ぶと同時に刎起きて、一間ばかり投打たれるやうになつて駆けたが、地を枕に、此度は横僵れになつた。袖も裾も力なくだらりと垂れた、紫の色は一水入つた如く褪せながら鮮明になつて、青澄んだ大空の處々、ちぎれ／＼に卵色の雲が出た。境内はパツとあかるくなつて、瞳の据つた夫人の毗に血がさした。

二十六

「何時だ、いま何時だ。」と夜具の襟深々と口許まで引被ぎ、櫛卷のつむりを枕に埋めたまゝで、夫人はおとなしい聲して附の女どもに尋ねられた。

一昨日の朝尋常ならぬ顔色で、表二階から速急に居室に引返されると、其の時いまだ昨夜のままで、一言も口をきかなかつたので。仔細を知らぬ女どもはあつけに取られた、其の日は常願寺に意外な出來事があつた。二月ばかり前に首を縊る眞似をして、小兒の乞食が表門の門に繩をわがねて下つたが、日數も経たず境内の葉櫻の下で、紫の紋着を着た若殿扮装の鯉屋の袖が殺された。下手人は鐘樓守の作藏で、悪怖れた色なく検べの役人の前に出て、(俺、金魚を捕りに失



せた颯を撲殺したでがす。とばかり、大方氣が違つたものであらうといふ沙汰。尤もこれは其場から擧げられた。其日からの引籠、何をいつても返事をなさらず、薬は勿論、一箸もものを食べない。病人は二人出来て、お新發意も蒼くなつて震へて居るが、それもこれも夫人の不快と何ういふ關係があるか一二の人を除いてはこゝに在るもの誰も知らず。たゞ枕許に附添つて、交代の夜通し看病、何處が惱むとも仰せられず、熱い寒いともあるのではないから、手のつけやうもなく、皆顔を見合はせて居るばかりだつた。既に此時まで、切齒一ツ音を立てられなかつたのであるから、いまかく時間を尋ねられた時、皆呼吸をのんで居るので、齒ぎしりの氣勢も知れるばかり、残らず聲は聞いたけれど、其とて餘り案外なので、僻耳だらうと思つて誰も答へない。

「何時だ。」と再び極めて沈んだ調子でいつた。

「何時だ。」と再び極めて沈んだ調子でいつた。

「何時だ。」と再び極めて沈んだ調子でいつた。

「何時だ。」と再び極めて沈んだ調子でいつた。

それでも應じなかつたので、強く、言尻をあげて、  
「何時だ。」  
「はい、あの、何ぞめしあがりませんか、奥様、皆御心配申して居ります。そしてお薬もお頂きなされませんと、お悪うございませう。實に皆が行届きませんで、何ぞお氣に障りましたことが

ございますなり、何様にもお詫を申します。御氣分が宜しくおなり遊ばしてから、また何うなりと思召をお通しなさいまして、お鹽梅のお悪い時はお平になさりませんと、お身體にさはりませうから、何うぞ何事も御堪忍なさいまして、御用をおつしやつて下さいまし。」と年ごろなのが口を切つて、二日ばかり謹んで自由にもものいはれず、いひたいくと胸にためて腹を膨らまして居たのを、こゝぞと眞先に吐出したのだから堪らない。

「何時だ。」と三たび靜かにいはれたのを、耳にもかけないで一膝出て、

「眞個でございますよ、何が何でも奥様、お湯一口召上りませんでは、お大切なお身體が一體何うなりますものでございますえ。此方等づねなら、づかゝ無理にでもお脈を診るのでございませうけれども、これがあなた様、うつかりお傍へも寄られません御身分でございますから、何ういたして宜いやら、皆が夜の目も寝ませずに、あたふた氣ばかり揉んで居りますのでございませう。何うぞ何事もまあ、御了簡遊ばして、お願ひでございませうから御養生遊ばして下さいまし。え、奥様、ねえ皆様。」

「はい、何うぞ奥様。」

夫人はものもいはず、心ばかり動いて少しく横になつた。

「何時だね。」



「お園さんなんざ、眞個でございますよ。奥様が何だつて何ういたさうと申して泣いてますぢやあございせんか、何もあの娘ばかりぢやあございせんけれど、ねえ。」

「左様でございますともね、お薬もお嫌、めしあがりますものも、おきむづかしうございますから、せめて何處を何うせいとか、あ、せいとか、おつしやりつけて下さいまし。」

「皆が途方にくれますものを。」

「何時だと聞くのに」と夫人はたいうに落ちてまたいはれたから、皆がはつと気がついたが、調子も變らず、何事もない様子。いつもかういふとちつたことのある時は、直に御痛癖だけれど、珍らしいと思つて、それから問はれた時刻をいほうとして、柱時計を見返る瞬間、ぶつけるやうにつむりが動いたと見る時、お顔が上つて手をのばし、枕頭なる手文庫の上にあつた、金側の女時計を引手繰つて取ると其まゝ、蒲團に身を埋めてふっくりとした夜具の襟から、手が出たと思ふと、無雙の黄金蓋が齒に鳴つて蓋があいたから、残らずしらせ返つて固唾をのんだ。

但いま蓋のあいた方は、數字の方ではなくつて裏の方、器械が見え透いて、小さなぜんまいが音もしないでづつしりとのびちゞみして見えた。其をまた、きもしないで見詰めて居たが、

「え、」と飛つくやうに口をつけて、硝子に前齒をあてた。バリ／＼といふ音がして、破れた黄金時計は閃くが如く光つて夫人の手から放れ、蒲團の端にかゝつてしばらく留まつたが、重たさうに這つて、疊の上へ落ちてづつしりとして留まつた。これには音もなかつたけれど、女どもは飛上るやうに驚いて、片膝立てたのがあり、手を上げたのがあり、口をあけたのがあり、黙つて俯向いたのがあり、ひつそりしながら周章てたのである。居すまひをも直さぬ内に、

「園」と呼んだ、この聲が落着いた、おとなしいものであつたので、あとをきづかつた一同ひと胸に應へ、

「はい」とためらはす返事をしたが、召されたお氣入は蓋しこゝに居るではない。

「園か、」

「はい」といつた當人は殊の外うろたへて、あたふたして、そゝツかしく、

「それ、お園さん。」

「はい」といひながら、一人は飛上るやうに立つて出た。

「園。」

「唯今」といつて、また一人駈けて行く。

「園や、」



「唯今、唯今参ります。」とばかりで逃げるやうに周章で出る。

「園や。」

「はい、あれ。」

「居ないのか。」

「はい、とあとしざりになつて爪立足、一人残された奴のみじめさといつたらない。」

「園や、

「唯今、あの何をして、あれ、おや、」

「園、

「お園さん、」と泣聲になつて、立つたり、居たりきよろ／＼眼であたりを見まはしたが、誰も居ないから一人さし置いて出るにも出られず、手足を窘めて、首をのばして、待つても急に來ないので、堪らなくなつてきよと／＼出る、部屋の口で迎に行つた眞先の女とばつたり逢ふ。

此方は掴みつくやうな權幕で、

「困るぢやあないか、何うしたつてんだね、晚いよ、お前、何うしたのさ。」とがみ／＼食ひつくやうに、しかし憚つて、ひつそりと極低聲。

二十八

園といふのは舊此地の生れで、姫様と同年幼い時からお傍に居る、優しい、綺麗な女である。七八歳の頃、姫様未だ乳母に齊眉かれて此寺に養はれて居たほどのことで、正月腰元づれで門の内に追羽子をした時、よぼ／＼の爺の屑屋が一人、ものの見境もなく入つて來て、追羽子の群を横切らうとして心なくよろめいた。此の妨のために、今あひてから渡されて、宙で受取らうとした姫の手を支へて、羽子が外れたので、いきなり持つて居た三人立の羽子板の柄で、爺の弱腰を一あて當てたから堪らない、浮足になつて向うへ怪飛んだ爺は、名代の因業もので、腹が立てば火をつける、火をつけると、口癖のやうにいふ近所でも忌憚つた執念深いのであつたから、得もいはれない眼光で姫の面を睨んで、其まよぼ／＼と出て行つた。あとで姫様は太く我儘を後悔遊ばし、乳母と相乗で貧乏横町裏の三軒目の爺が住居へ行つて手をついてお詫をなすつた。ぢいやといつて頭を下げられた時は、あぶら汗を流して難有さが身に染みしたので、泣いて嬉しがり、世を怨み身を果敢なんだ心を和げられて、望をとあるにまかせ、一人の女を頼み参らせたのがこの園で。それから片時も傍を離し給はず、園もまたよく姫の心をのみこんで齊眉くので、表向は主従恰もまつたくの姉妹のやう。東京にも一所に行つてまた此寺に従うて來た。いつかも風



邪の心地で、園が室を隔てて寐たことがあるが、夜中に淋しいといつて、夫人は一人一所に寐に行かれた。ちやうど其時病氣だといふものをつかまへて、何かこたはつて居たものがあつて、聲も立て得ないで窘められた園が、困じ果てた折だつたから、夫人は何者とも見定めなく、手にした雪洞でハタと坊主あたまの赤いのを打ひしいだ。トタンに灯が消えてあやめも分らず、打懲された好色漢は其まゝ消失せたか、山猫の化けたのでも何でもなかつた。(園うるさいわなう)といつて抱かれて寐ねをなすつた、それほどの睦じさ。

「それがねお前様不可ないんです。お園さんはいま此方へ來られやしませんよ。拍子の悪い時は悪いもんだね、お前様、そら、此間作藏に殺された藝妓の懐中にあつたといふ、騒の、あのお像ね。あれがお前、取つて片附けたあとで、また失なつたといつて表ぢやあ騒いだのを知つてるだらう。それがお前、大それた彼のうつくしい顔をしたお園さんが盗んだんだつてね。いえ、何でも怪いことがあつたのか、ばれか、つてお前、いま、忍海さんと取締の婆さんとで取占めてる最中ぢやあないか。お召も何もあつたもんぢやあないやね。私が行つた時アお前さん、片手を折れるほど捻上げられて、ひいゝ泣いてた處ぢやないか。これから縛るんだ、打つんだつていふ騒ぎ。何此の女生爪をはがすより裸にする方が恥かしがりだからきゝめがある、なんて大變だね。もう、打たれたらうよ、あれお聞きな、それ泣いてるだらう。酷い目に合はすさうだ。」とひそめ

き告げて、眉を顰めた處へ、二番手、三番手が引續いて取つて返す。

「何うしたい、何うしたよ。」

「上へ着てるのを剥がれたさ。」

「大變だ、びしゝやつてるよ。」と切ない顔色をしながら部屋の口に落合つた。

「園、園や。」

「あれ、あれだもの、お前、私一人残つて何なに弱つたか知れやしない。むかうでも放すまいが、長いものにや巻かれろだ、奥様が恐いやね、かうしちやあ居られない、私が行くから頼むよ。」といひすてて、残つてみじめを見たのが堪らない風で駈け出すと、さそはれて後に續き、裳を煽つて三人がこみあひながら、われもわれもとばたゝばた、入亂れに蹠音が廊下をへだたる。

二十九

「奥様、姫様。」と枕許に寄つて、取亂した髪を握りあへず、やうゝしぼらくの猶豫を與へられ來た園は、寝られたもの淋しい笑顔を、夜具の襟から差覗いて優しく夫人に差向ける。引添うて入つて來た女中頭は、無手と傍に坐つて眼も放たぬ。

「園か」と眼を睜いて夫人は、幾度も呼ばしたのを心にも留めない狀で、



「少し脱がせておくれ、重いから」といつて、白い手を纒かに見せて、上へ衾の襟を上げるやうにする。

「よろしうございますか、お寒氣はいたしませんか。」といひく片膝すらして、園は横合から夜具に手をかけて、後へソツと引いた。

「もうちつと」といつた夫人の、しつかりかきあはせた雪のやうな衣紋が出た。

「姫様、お鹽梅は」と心易ういつた園は、お顔を見て情ない顔をした。

「園」

「はい」と頷くやうに返事をして、園は氣輕く装うたのである。

「瘡だらうと思ふよ。」といひかけて夫人はといきをついた。

「急に寒氣がするし、そしていまはもう熱くツて熱くツて仕やうがないから」とそれでもパツチリ眼をあいて、きれいな、頬の筋一つ動かさない、我慢強い意氣は面に溢れた。

「左様も分りません。」

「む、屹度さうだよ、面倒臭いな。」

「お鬱陶しく在らつしやいませう。」

「あ、落してしまはうよ。あの、母様に頂いて来たお守刀がある、あれを出してくれないか。」

「はい」といつたが、いぶかしげに夫人の顔を覗つた。

「姫様。」

「可いんだよ、おまじなひを知つてるから。」

おとなしい落つたもののおつしやりやう。しばらくして、

「畏りました。」と心得た答をして園は座を立つた。女中頭は眼をくるくるとやつて、易からぬ色を顯はして控へたが、箆筒の鍔がカタ／＼といつた時、堪らず聲をかけて、

「これ！」

園は聞かない振をして、恭しく錦の袋を取出すと、片手に柄を捧げて念ずるが如く伏拜む。

「これ、お園さん、これ。」

引出がまたカタリと入つた。園は引返して来てまた枕に寄る。

「これさ、これ」と少しあら／＼しくいつた。

返事もしないで差出すと、寝たまゝ八重に絡うた紐をくるくると手繰る。總が垂れて、蒲團にかつて、口が弛んだ、眞白に白鞠の柄が見える。

「これ、お前、これ！」と口せはしくにじり寄るのを、軽くおさへて、

「いゝえ、私がおつき申して居りますから宜うございます。」と澄ましていひ放したが、九寸五分



の細長い眞珠に青味を帯びた重いのが、水が垂りさうで、夫人の顔に映じた時は園も顔の色を動かした。

夫人は右手に握り持つて、しばらく目前に横へたが、左の手を上げて、今夜具を落さしめてあらはにした、ふつくりとした白襟の合目へさし入れて、ぐいとあけた。のどから胸は恰も玉をのべたやう、雪に曇がかつたやうに左右にはらりと開いたと思ふと、横にして焼刃の腹をひやひやとおのが胸におしあてた。

「姫様、」と思はず打わな、いて手に縫る、園の掌を胸にあてさしたま、夫人は自若として、キツと天井を見上げた。

三十

天井に小さな節穴が一箇あつて、其の節穴に目が一ツ嵌つて居るのを、凡夫等は心着くまい。これは東門にかけて敵を見るが如き悟の開けないものではない、佛眼と稱へて三十二相の一に數へらるゝ尊いものである。

此の田舎に於て出るに駕籠、坐れば脇息、立てば幾千の衆生の頭が其の足許に九拜する。位は從五位、一度駕籠を動かせば、辻も、小路も、屋根の上も、橋の下も、蟻の塔の如き人ばかり。珠數をかけて念するやら、手を合はせて拜むやら、嬉しがつて泣くやら、難程がつて唸くやら、此の御方の眼脂も、唾も、耳の垢も、甘露より黄金より煎薬よりも尊まるゝ。活佛様と申上ぐるものは妙なことをなさるもので、天井に節穴をこしらへ、御自分のおつれあひの鬮を、隙ありといふと人知れず根氣よく覗いてござる。むかし彌次郎兵衛は廁の節穴からこれをしたが、いまの常願寺の五位の僧正は、何のことはない二階から目薬だ。ソレこれが、柔和忍辱大悲願の御心を持つて衆生を御覽する目であるから、凡慮の料るべき處のものではない、いつも好い樂をしたらうけれど、……此時は驚いた。

耳が赤くなつて上氣をして居させられた園の内の、うつくしい胸のあたりへ守刀をあてたので、恰も眼球の中へ刃尖を突通された如くに感じて、五位は眼が眩んで背に冷汗を流した。モーの眼は鼻と口と眉と額と額の皺と、一所にびつたり疊の上にくつついて居るのであるから、もの用には立たなかつた。

五位はハヤもう眼も見えず、手を伸ばしても届かぬわけなり、勿論聲を立てるべき數でない。歩行かうにも生憎大佛づくりでふとつちよの重いと來て居るから、づつしりとやつては、おや、蹺音の大な鼠だよ位で、人の了簡をするづうたいではない。

で、恰も象變じて從五位になつた形で、釘づけにされたやう、手足のあがきもならないで、悶



えながら覗いて居る。

「園」と静かにいつて、夫人はおさへ留めた手を放さうとしたけれど、園はしつかりと縫りついで、

「姫様、何を遊ばします」といつた、おろ／＼聲。女中頭は寄るにも寄りられず、汗を擽つてまじまじとする。

切尖を返して、ひらりとまた乳のあたりへおしあてた、更に持直してまた喉のあたりを撫でた。劍の冴は、十文字に、夫人の寂寞たる胸の上に閃めいた。

「ひや／＼として可いよ、可い心持だ。もつとこんなにしたら何んなに可からうねえ。」また取直しさうにしたが、園が蒼くなつておど／＼する、危み恐るゝ顔を見て莞爾して、

「まじなひだよ、お前、何が恐いのさ、もう可い、もう可いよ。」といつて、枕に片手をついて半ば身を起すと、一處に襟を搔合はせ、搔合はせて、搔合はせた上を、づつとしごいた。

「あゝ、せい／＼した、可い心持になつた、瘡なぞといふものは氣もないものだの、もうあたりへだつて寄りつきやしないから。」とさつきのまゝ、手にして居た、守刀をソト頂いたが、ホツと呼吸をついて手を放した。まだ動悸の納まらない、園を見返つて、

「お前、其のさやを持つて一所について来ておくれ」といつて、二日湯水を通さなかつた身體を、しやんとして襦を引いてすツと並つた。襦々とした、なよやかな肌も、瓜さきからつむりの上まで、撓まぬ一筋の矢を貫いた凛然たる趣がある。

三十一

「奥様、まあ、どちらへ行かつしやります。」と婆さんは詰るが如くに聞いた。これには眼もかけず返事もしないで、もの問ひたげに案じ煩ふ園の方を見返つて、

「汗がついたらう、刀を汚したから庭へ行つて、あの清水で洗はうよ。」といつて片袖に包みながら、切尖をじつと御覽じた。

其清水は土地に誰知らぬ者もない、弓の清水と稱へて、いにしへ木曾の冠者義仲が八幡を念じて水を求め、弓杖で突刺した石の裂目から銀の様な清水が噴出した。石は堅五尺ばかり、周囲が二尺ばかりある黒く滑かに艶かなので、恰も鐵を磨いた烏帽子の如き形である。其少しく窪んだ上の口から滾々としてほとばしり出る水勢、八百年のいまに一滴も乾はせぬ。恰も夕月が大きく空近い處に懸つた。滴る翠の葉越の影に、石は漆黒に露を帯びて、颯々と落ちて、薄暗い地に脈脈と溢れ流るゝ水枝は、皆堆うして、潔く白く且つ透通る。水の口の素く練つた一幅の布に、腰を屈めて劍の切尖を貫いた時、水は七筋に分れて焼刃にからんだ。雫を切つて拂ひ、園が差出



した鞘を取つて、夫人は心静かにこれを納めて、晴々しい顔色で空を眺めた。月の前を縫つて櫛の樹の小枝から、梅の幹へ、銀のやうな針線を引いて、拇のさきばかりの黒い塊が、さらりと傳うたが、引返して、さ、蟹の足が月あかりに動いて見え、斜めに中途から折れて、また舊の枝に糸を繰つて傳うて上がる。ちやうど清水の上を、月の下を、行き戻りして圍を營んで居るのである。

「圍」と呼んで、伸上るやうにして上に指をさした。血が上つたか、庭下駄ゆるく引かけた足許がよろしくして、前へ僵れさうになつた。

「お危うございます。」と飛つて肩を貸した、圍の脊に手をついて、夫人は力なげに氣をゆるした姿で立つたが、見返ると樹立を透かして、づらりと簾がかつて居る。縁側は一樣に、はてしなく細く長く斜めに続く。上なる二階の窓から、頬杖ついて、顔を出して、此方を見て居るのは確に五位。夫人はぢつと見た身にまた意地が通つて、まつすぐに立つて凜とした。

「奥様つめたい風があたりますから、お床へ入らつしやいませ。」と殆んど頬を合はせるやうに並んで居る顔を振向けた。

「いゝえ、それよりもね、圍」と夫人は瞳を轉じて、竹まばらな、低い裏庭の垣根を見ながら、二ツ三ツ庭下駄を動かして、あるくともなく其方へ進んで、

「外は何處だの。」

「すぐ、あの旅をする人が通りますよ、舊この清水も路傍にあつたんでございますと。」

「さうかい、まあ此方へ来て見な。」といひながら、ぱたりくと緩く庭下駄を引摺つて、垣根間近になつた。正面に田畝を隔てて、山懐がかすかに見える。垣根越に、山續きの故道をのび上るやうにして覗いたが、つと圍が手を放した、夫人はつかつかと寄つて、僵れるやうに前臥になつて、垣に両手をかけた勢、圍は思はずあれといつて駆け寄つた。

「奥様。」

「連れておいで、圍、可いから、可いから讚平の處へ連れておいで。」と言急にいふより早く、踏越さうとてか垣の上へ足をあげた、胸がぶつかつて僵れかゝる。竹垣はぼり、といふ音。堪りかねて小蔭から走り出した、女中頭は眞黒になつて、

「えゝ！」といつて袂に継ると、片手を垣に継つて半身を向うへ突出しながら、振返つた、サツクに懐剣でピタと其額をあてた。夫人は敵と戦ふ勇士の女裝したもののやうである。打たれて女中頭は、後ざまに尻もちをついてあつといつた。

「疾く」と圍をさしまねきながら、一度見返る、清水は暗い中に白く流れて、あたりは透通る樹の葉の緑、水にも地にも月のかげがさした。風が颯と出て、組みかけた車の輻形の蜘蛛の圍はは



らりと破れて、眞直に二線糸を引いて、おもりの黒いものはほたりと落ちた。山の下あたりを遙かに松明が通る。

三十二

「待つて下さいましな、まあ、待つて下さいましよ。讃さん、其處に居るの、眞暗でなんにも分りやしません。讃さん、待つて下さいましよ。」

「おい、此處だよ、な、此處に居らあな、けた、ましいぜえ、人が聞くと何だと思ふ。」

「でもあなたが早々と行らつしやるんだもの、私や此邊を歩いたことがないので、高足ばかりして、溝だか、橋だか、何だかもうまるで分りやしませんよ。」

「左様だらう、めつたにやあお前たちの歩行かねえ處よ。」

「そしてまあ、こんな暗い晩たらありませんねえ。おや、石ッころだ。さあ、」

「踏切つたか、」

「何うですか。」

「からだらしがねえなあ。」

「い、え、引くらかへしたの、何ともございませんでした。」とつくばつて穿直した氣勢である。

「危えせ、また何だつて追懸けて来たんだらう。あれほどいつて分つたぢやあないか、姫様も紙得をなすつたのに、お前ばかり騒いでら。」と投げるやうにいつた。しばらく黙つて、

「讃さん、」

「何うした。」

「あなたまあ、大變言葉づかひがございにおなんなすつて、そして職人見たやうに荒つぽいのねえ。」

「だつて、私あ職人ぢやあねえか。お前またそれをはじめたぜ。だつて、成行なら仕方がねえや、母はかうも生みつけなかつたらうけれど、自分が好きではじめた仕事だ。何も細工場に坐つて鐵鎚をつかひながら、侍、候、參らせますをやつてるにやアあたらねえ。」

「そりや、まあ其でも可いけれど、あなた何時お歸りなさいますの。何だかお出かけなさりやうがなさりやうだから、それで私あ後が案じられて、追懸けて来たんですよ。」

「だからよ、姫様と、お前とが、何處かへ引越すか、それともお寺へ歸るかした後で歸るんだ。」

「それぢやあ何なの、もう姫様にはお逢ひなさらないの。」

「未練が出るばかりだ。むかうばかりぢやあねえ、此方も怪いから始末にをえねえや。何うするもんだ、其内にや何うかならうさ。」



「そんなことをおつしやつて、それぢやあ讃さん、あなた皆忘れつちまつたんですか。」

「忘れねえ。藤色の紋着を着てお傍に居た時分から、今日までだ、いや、今夜の今までだ、私あ忘れねえ。眞個だ、こんなことをいつちやあ済まねえけれど、鯉屋のあれが殺されたつて、そりや何に較べても較べやうはねえ、可哀相でならないんだけれど、姫様にくらべちやあ、打まけた處半分も思やしない。だから見な、よ、お園さん、體の可い姦通ぢやあねえか。あひては坊主だつて今の世の中だ。殊に姫様は御主人だ、しかもな、母が命まで差上げてお育て申した方だ、死んだ母に済まず、本人は可いにしろ、姫様といふ名に済まねえや。世間にも済まねえしよ、六ヶしいこたあねえ、第一私あ自分に済まねえぜ。餓鬼の時から叩き込んだ、大袈裟ぢやあねえが藝と鐵鎚を持つ此の大事な腕で、汚らはしい、坊主の媽々を抱いて済むものかい。」

しかし一か八かで、それもこれも打ちやつた。世の中にあ坊主を拜むもなアあつても、死んだ師匠を難有がるもなあねえ。へむ、くだらねえ、コチ／＼叩いたつて、何だけがものだ、五十六十まで生きてようたあ思はずよ。

だから見ねえ、否應なしに、生身のしかも、うつくしい女二人まで背負込んだぜ、勝手馴れめえと思つて私あお飯を焚いた、私あ生れてからはじめてだ。姫様だつて、いる男に一度お飯を焚かせて食や、本望だらう、不足を聞く分はねえ。

といったやうなものの、細工盤のむかうに坐つて、嬉しさうに見て居られりや、私だつてうはの空だ。此ま、死んだつて此方でも怨はねえ。

處でだ、此間來る時土産に持つて來てくんすつた、あの師匠が魂の入つた御像だ、可いかい。なるほどおかみさんが夢に見て騒いだやうに、何の因縁だか知らねえが、片一方の眼が潰れて居らあ。このためにやあ可哀相に、間違にもしろお袖さんが死んだんだ。可、藝を入れて直さうと、脂ぼしらにくるんで眼の前へ持つて來ると、さあいけねえ。

お前も見て居たらう、二月の餘だ、夜も晝も、おもしろをかしい口一ツ利かないで、なやみ切つたが、何うしても直されねえ。こんな鈍い腕ぢやあねえ筈だが、待て、私あ片眼が見えねえんだ。めつかちの職人風情にやあ、此の師匠の手の跡は何とも仕方がねえか不知と、さう思や、あきらめるより外あねえ。あきらめた日にやあ留める分だ。何うせ、名ばかりでも御主人の、一旦嫁いた、汝にやあ姫様といはなけりやあならねえ女と一室處に居る位だ。何のそんなものは打棄つて置けばい、やうなもんだけれど、それぢやあ餘りしつきりがねえ。身持は身持だ、腕は腕だ。鯖あ食つた口でも陀羅尼は讀まれさうなもんだ、と高を括つて居たが勘違ひ、第一師匠には義理があり、夢にまで見たといふ、おかみさんに對してもだ、殺されたお袖さんにつけても、手前が身體を棄てても可いほどな、情婦が候とばかりで、逸を打つちやあ男でねえ。するほどのことさ



へすりや、そりや姦通も可からうよ、ばくちも大酒も可からうが、なま半じやくのちい／＼たも  
れが、人の女房もよく出来たと、かういはれちやあ業腹だ。何でもこの眼をあけなけりやと、こ  
この道理を肯分けて貰つて、いまのさき姫様とすつぱり手を切つた。お前も知つてる、姫様のあ  
の氣象よ。一言で埒があいた、こゝだと思つて氣を取直しや、わづかの間に眼が明いたわ。氣の  
故か知らねえが、一盃で損じがなほつた。あゝ、魂が残らうといふほどの細工、鯖を食つた口ぢ  
やあ經は讀めねえわけだ。

待構へてるおかみさんに早速見せて喜ばさう。此の間からいくたび見せても、こんなこつちや  
あ／＼といひなすつた。今度のこれなら私が方で合點だ、人に見て貰つて、可いでございませう  
かといふやうな、そんな甘えんぢやあねえ。これでぐづ／＼いやあ叱り飛ばさあ、死んだ師匠の  
かみさんたあ言はせねえ。

まづこりや可いさ、處でいまこれが出来たからといつて、お役目は済んだものにして、また舊  
の御座へ御直り候へとやられるもんか。眼をねむつてやりや行るが、さうするとあの意地の悪い  
御像あ、今度には兩眼とも失くさうも分らねえ。極めた事は極めた事だ、きれたらさつぱりとする  
こつた。だがな、お園さん、姫様の御身分も、またいまの御境界も、そこはまた藤色の紋着に立  
歸つてよく知つてる。知つててすることだから可からうではないか。何だけがものだ。五十六十

まで生きようたあ思はねえ。

親もなし、兄弟もなし、一人ぼつち、おつかあと、姫様の夢をちやんぼんに見てこれまで育つ  
た位なもんだ。可いやねえ、お園さん、姫様は何もおつしやらねえぢやあねえか。悪く思ひなさ  
んな、いひやうは些と亂暴だか知らねえけれど、構ふこたあねえ。お前ばかり騒いでるんだぜ、  
可いから歸んねえ、何も心配することあねえよ。

お園はすゝり泣のうるんだ聲で、

「はい、もうよく分はわかりましたけれども、讃さん、あなたも分りますか、姫様は生きておい  
でなさりやあしますまいと思ひまして、……」

二人ともしばらく黙つた。ものあやめも分らなかつたのに、背負上げで結んだお園の繻子の  
帯と、髪と、襟脚の雪のやうな色とが、ちらりと見えて、

「あれ！」といつて、ひしと讃平の胸に絶つた。壁の色があかるく見えて町家の廂合と思ふあた  
り、墨のやうな夜の空にかげも宿さず、ひらめきもせず、曇りとして輪廓の正しからぬ炎の、  
青黒いのが燃えもしないでぼんやり傳うた。

讃平は胸のあたりにお園の額を擁して、ものいひぶりとはうらはらな、片眼こそ盲ひたれ、  
鼻の高い、細面で秀でた其の濃い眉のあたりに蒼味を帯びた、片眼を清しくあいてキツと見たが、



何やらいつて眼を瞑つた。燐火は何處で消えたか、分らず、失せて、またあやめも分たすなつた。  
やゝあつて、とききをついて、讚平は思出したやうに呟いた。  
「はてな、師匠が三年目の祥月命日、トお袖さんが死んだ日だ。」  
そしてちやうど姫が自殺をした時であつた。が、これは敢て婦人を犠牲にしなれば藝術が進  
まぬといふことを書いたものではない。

## 五本松



衾に入つたのは十二時を聞いて小半時経つた後で、秋の夜は長いから、それまでにいろ／＼な事があつた。血氣で好奇心の熾な少年の爲る事は、自分と都合五人づれで、十一時過から天神山を指して登つたことである。

麓の町に澄渡つた月の下に、まだ夜店が残つて居た。三角形の行燈に、くだものと假名を朱で書いた爺さんの店で、少しばかり賣残つた棗と、蒸栗とを買つて、ひえて冷いのを手に袂に入れた。袂も重いほど、した／＼と降るが如き夜露で、道すがら渡つた小橋の欄干も、水を打つたやうであつた。

市の者が遊山場にするのであるから、坂も長くはない。又険しくもないので、たゞ處々樹立に入つて暗くなり、森を潜つて出ると明るくなる月夜の山道を、いづれも草の露に濡るゝ足を、重くも思はず浮かれて登る。

天神山と云ふ、其の巔から道を轉じて、愛宕といふのにかゝつて來た。是で臥龍山の半腹を一廻りしたことになる。歸途になると、歩行くのに話の種子も途絶えたといふもので、聲を合せて語をはじめた。

皆で節の揃ふのも多度はないから、おなじ歌ばかり繰返したのにも飽の來たので、後は思ひ思ひに、軍歌、童謡、流行唄、いかさまなぞめきも交つて、人憚らぬ高調子、麓で聞いたら、猪狩の鯨波の聲だと思ふであらう、と然う思つた時、山道の細い坂を一行になつた、眞先に立つて居た自分は、弗と心着いた。

此の愛宕には、五本松と云つて、幾年経るか、老松一株、岳の巔に立つて居るが、根から五本に別れて、梢が丸く繁つて居る。

大屋根に上ると、土蜘蛛の蟠つたやうな根から梢まで、間近にあからさまに見える。其の橋の上からでも、辻の角からでも、路地の中からでも、櫺子の窓からでも、凡そ全市街の要處々々、此松が見えて、景色を添へない處はない。

石燈籠を置くにも、遠景に此松を控へ、池を造るにも、眺めに此松を添へると云つたやうなものはない。尤も幹の周囲には注連を飾つて、傍に山伏の居る古寺が一字ある。此の神木に對し、少しでも侮蔑を加へたものは、立處に其の罰を蒙るといふ、奇しく怪しき物語は、口碑に傳つて數ふるに勝へないが、其より、疑ひもなく去年の秋。

塗師屋の職人に源といふ俠氣が在つて、大口を利く、豪傑がる、人を人とも思はぬのだから、



神佛も何もない。其癖、春秋の社日の夜參詣、蓮如忌の山遊びなどは、缺した事がないのに、曰く、俺様にか、つちや、天狗も馬の糞も何もねえと、汚口を叩いて彌次郎兵衛のやうな太平樂。魔は夜中に騒しいのを嫌ふてえから、一番愛宕山を呼崩してくれべい、皆來ねえ、屁放りの弱蟲め、那樣了簡だから一人で寝るのだ、と罵つて、無理強ひに連中を募つた。これが五人、件の源さんが眞先に立つて、同じく天神山から鳴り下つて、愛宕へ懸つたのは丁度丑の刻。

路が狭いのであるから、其時も一列になつて下りて來たが、旋て五本松を通り過ぎ、麓の灯が足の下に見えた時、様あ見ろ、何うだ、魔なんざ身もんだえも羽ばたきも出來るもんぢやあるめえがの、それ、と言つて隊長傲然と振返ると、恚は如何に、誰も見えない。——今まで背後に附着いて來たのが、四人とも影も形もなく、源、唯一人になつて居たから、あツと思つた切。手にも取られず、目にも見えないが、唯其の疾さは、鳶が羽を伸ばした時ほどの、もの氣勢に追懸けられる。其の可恐しさに、丘とも謂はず、岨とも謂はず、狂ひ／＼逃げ廻つたが、前後不覺の間にも、あはれ、足疾鬼も從ふべからざる自轉車に乗つたら、其の追ふ者から遁れて、人間界に歸る事が出來るだらう、と思ひ詰めて居たと、半年ばかり經て源が本氣になつてから、前の世の事であつたやうに思ひ出して語つた。

其時の後の四人は、奈何して又源が目から消えたといふのに、一番最後の殿で歩行いて居た一

人が、五本松の下でふツつりと鼻緒を切つたので、おや、と言つて立停ると、何だ、何だ、といふので、前に立つた三人言合せてやうに氣を揃へて、其のおや、の何なるかを怪んで立停つた、此の咄嗟の間に、源は何にも知らないで、平氣で歩行いたから、少し離れて振返つた時は、後の四人が立停つた時だつたのである。

四人は源を見失つて、ついた、先へ歸つたものとばかり、別に怪まないで麓に下り、別れ／＼に歸つて寢た。夜中に源が家から尋ねて來たので、はじめて行方の知れないのに氣が付いて、それから騒ぎ出したといふ。

心からでもあらう、然し夜も同じ時も同じ時、然も、言合せてやうな五人連、自分は眞先に立つて居たから、異常はなくとも、あまり此處で騒ぐのはよくないと、弗と心に然う浮んだ。

譯を言つて、唄ふのを止めさせよう、と思つたけれども、中には殊の外臆病なのがあつて、厭だといふのを、是も些と無理強ひに、負け惜みを出させて連れて來たので、自分と今一人、高山といふ、是は殿を打つて居た。二人は可いが、愁つかかな事言出して、此の山の中で、神經でも起されてはと思つて、わざと言はずじまひ。其儘自分だけは聲を呑んだが、外連は、こらしよの、こらさ、こらくくと好元氣で、草木や山の香が骨まで透る夜氣にもめげず、麓へ下りたので、自分分は吻といふ息を吐いた。



家に近い四辻で、月明に濡れた黒い姿で、横を向き、後になり、斜に立ち、手を舉げて、放れ放れに別れて歸つた。

自分で戸締をして、二階へ上つて衾を引被いたが、烈しい夜露に浸された所爲であらう、體は凡て濡紙で巻かれたやうで、而して胸も背も冷たかつた。

暗い木立の中を通す、一條の月の光の明い中を、山を貫いて歩行いて來た景色などを思ひ浮めながら、疲れてうとくしたと思ふと、瓦斯に犯されるやうな心持、唇がはしやいで、頭が赫々と逆上るので、うつとりしながら目を擦つて起上る。

枕元に置いた金の火鉢に、寝るのだから埋んで置いた、ごつくした大きな炭が、不殘眞赤になつて烈々となつて燃える。

顔を向けると咽せさうなのに、再び搔寄せて灰を浴せて、そのまゝ、仰向けになつたが、其時から目が冴えた、枕にした愛宕の山嵐は、五本松を潛つて襲ふが如く身に浸みる。

ひつそりして物音もしない時、颯とばかりに戸外を駈けて行くものの氣勢がある。其とも思ひ料らず、ふと考へた、其の疾さは丁ど犬が全速力を籠めて四足で駈けるほどで、而して唯脚ばかりではない、凡そ鳶が伸したばかりの翼を備へた物であらうと思ひ取つた、更にその駈けて行つたのを、地を行くでもなく、又宙を飛ぶでもなく、着かず放れず其の翼の尖、脚の裏がかすかに

地に着いたほど、地の上一寸の所を矢の如くに通り去つたかのやうである。ものの音はたゞ一瞬間であつたが、其の氣勢は脈々として長く、耳に残つて消え失せない。

自分は其の形跡を窺はうと思つて、衾から離れて出て、障子を開けて雨戸に手をかけたが、少し猶豫つた。

月明りは板戸の隙から一筋入つて、灯を後にした寝衣の襟へさす、此の明るさでは、蟲も見えよう、今戸を開けて、戸外に甚麼ものを見ようも知れぬ、と殆ど想像し得られない怪しい形を心に描いて逡巡したのである。

けれども、思切つて一枚開けた、板戸一枚がたりと入つた、戸袋へどんと手頃な石塊を打當てた音がした。

目を眠つて坐つたが、及腰に戸外を透すと、誰も居ない、向の屋根と其の隣の藏があるばかり、何にもない、眞晝のやうな月夜である。

もの音の通り去つた、西の方なる町の果には、白々と霧がかゝつて居た。落着いて、密と静に又雨戸を閉めて、障子には氣が付かず、閉めると旋て、つかゝと引返し

て、倒れるやうに衾に入つて、襟を顔の半ばに引掛けて、熱として居た。木太刀を打合ふ音、駈違ひ入亂る、數百人の蹙音、一しきり止むと、女のひいゝ泣く聲がす



る。又太刀の音、足の音、一しきり止む、と又泣聲がする。手に取るやうに聞える。が間近ではない。町を一つ隔てた山の麓の通りから、曩渡つた橋の上へかけて、推しつ返しつ、恰も軍が始つたやうであつた、其の不思議よりも、寧ろ是を聞いて居た自分を怪まねばならぬ。

凡そ此の修羅の消息は、絶えず一二時間も續いたらう。果は聞き馴れて敢て耳を敬ず、氣も遠くなつてうとくすると、何といふ先觸はなしに、唯彼の高山といふのが血だらけになつて戸を敲いて来る、手も足も血塗になつて来るから、戸を開けて入れてやらねばならない、と然う思ひ思ひ、うつとりとなつて寝たものらしい。

起きると、我ながら慌しくなつて驅けて家を出て、然まで遠方ではなかつた其人の下宿を尋ねた。

いつもの寢坊が早起もをかしいのに、机の前に、寢衣の儘茫乎とも思をして坐つて居たが、顔を見ると突然自分の名を呼んで、昨夕は何事もなかつたか、と言つた。

渠もよく寢付かれなかつたので、これは礫も打たれず、怪禽の地を驅けるのも知らなかつたが、修羅の消息は同じやうに聞いたのである。

而して恐ろしい様な顔をして見せた。両手とも赤いものに浸されて居た。顔を洗はうとして弗と氣が注いたと言つた。掌と甲は落したが、まだ洗ひ残した指と指との間は、十本とも斑に黒ず

んだ色の赤いものに塗れて居たので、赤インキでもない、朱でもない、魚の腸の色でもないが、血ぢやあるまい、けれども顔を見合せた時は、心々に領いた。

窓を開ければ五本松の梢が、向の物干しの陰からほつきりと見えるのだけれど、何か憚る處があつて、其二三日は垂籠めて居た、其だけで無事であつた。



繪  
日  
傘



塵埃を避けて、人混雑の中を抜けて、若木の櫻の下に立停つた時、孫と見えた八ッばかりの男の兒は、持つてた繪日傘を婆さんの手に渡した。

薄紅の花片、赤い蕊、短冊は白で抜いて一面に彩つた繪日傘の小さなのを、開いたまゝ受取つて、婆さんは片手に高くこれを翳した。日傘の頭が枝に觸つて、咲亂れた花はゆらくと動いた。

「お婆あちゃん、あ婆あちゃん。」と何を見着けたか高聲で婆さんと呼懸けた、孫は木綿の八丈の布子を着て、淺黄の唐縮緬の帯を締め、千草色のちよこなんとした股引を穿き、足袋なしで、赤紙で鼻緒を巻いた藁草履を穿いて居る。

おなじ藁草履を婆さんも穿いて、お花見のこれは揃ひの氣。二三度洗晒したやうな薄茶色の無地の着物で、吳紹の幅狭な帯を締めた、六十ばかりの、年紀の割には脊の高い、頬の肥のゆつたりした、口元に微笑の見ゆる、額の廣い、鼻筋の通つたのが、縁の太い大な眼鏡の、鼻にあたる

處を黒い切で嵩高に巻いたのを、眼鏡といふもの掛けたやうに乗つけて居る。其の眼鏡越にあわたしく呼んだ孫の、事ありげな顔を透して、

「何ぢや、え、何ぢや、何うしたのぢや。」

「あれ、不可いよ、お婆あちゃん、不可いよ。」

と、孫は目を睜つて指したので、婆さんは上へ反り、眞直に翳して居た繪日傘を、すらして肩に懸けながら仰向いて見た。

櫻の枝に鳥が一羽、此奴權現様の森に棲まつて花時の人に馴れ切つて居るから、澄したもので、婆さんの素白なそげ髪の丁度上と思ふ處に黒い嘴をあててうらおもて枝をコツ／＼。婆さんは鼻眼鏡をきらりとさせて、

「何ぢや、これか、これかい坊や。」といつて仔細のない顔。

小兒は些少あせつた形で、

「可けないよ、あれ、突つくよ、突つくよ。」と急ぎ込むでいひながら、千草色の股引を穿いた短い足を踏むで、足踏して、

「叱！叱！」と下から打たうとする。

「可いよ、可いよ。」と婆さんは宥めてものともしない。



「可かあないよ、あれ、可けないよ。叱……」

か！う！か！う！ 洞穴の中で遠い處に鳴くやうな聲を出して、鳥はけろりとして、こと、こと、こと、ことと、ことと、こととをこすつて止めないから、

「可厭だなあ、私、おばあちゃん、おばあちゃん。」とじれきつて、小兒は泣出しさうになつた。數萬の群集、上野の山は、櫻といろ／＼な衣の綾。降りかゝる風の花片と、翻る裙袂とを組交ぜて、これに晴々した蒼空が重なるので、美しさの果が知れない其の片隅の、一株の櫻の下に、婆さんと孫とがイぢで居る、上の枝に、鳥は蓋し楕圓形の、あとさき尖がつた一個の黒い塊である。

「可いよ、坊や、これはあの、その、花咲爺の化けたのぢや。」と頷くやうに鼻眼鏡をがつくりさせて、婆さんは俯向きざまに戯れる。

小兒はこれにも頭を掉つて、

「嘘だあ、おばあちゃん、嘘の皮だい。」

「嘘なものか、本當ぢや、なう、爺さん。」と鳥を仰いだ婆さんの眼鏡は又キラリとして、凸な其硝子に盛の花が透通つて、薄い色の紅が細かに映つた。小兒は目を睜つて、鳥を瞻める。

二

色の白い、ふつくりした、愛くるしい、目の清しい小兒の顔を、垢の着かぬ小薩張した此の一張羅で一寸見違へたが、襤褸着物の尻端折、貝の口に結んだ帯の結目に、爺の代から傳はつたものと惟はるゝ、馬乗提灯の煤けたのを挿して、身體と不釣合に提灯の柄が長いから、歩く度にはずむで、上下八文字にふら／＼する、上藤の紋のついた薄暗いの前に立つて、唐がらし、納豆、納豆！と張上げた聲で、山の手邊を賣つてあるく兒を思出したが、確に違ひない、それではアノ婆さんの孫だつたかと、私は隣の次の、次の櫻の下に立つて見て居た、足許には竹の皮包の解いた殻なのと、白紙の切とが散ばつて居た。

「化けたのだつて、私、可厭だあ、私可厭だあ、おばあちゃん、不可いよ。」

と小兒は伸上つて手を空さまに鳥を追はうとする。婆さんは更に氣に懸ける様子もないが、小兒は甚しく思むやうで、私は見ながら何かのしらせであるらしいと思つた。

婆さんは口元で深く皺を入れて暢氣な笑を帯び、

「可いよ、可いよ、そんならば、これ」と、片手で、殆ど躍りさうに急立つ孫の頭を押へて、吳紹の帯締めた腰を斜に捻つた。



「爺さんや、これ、孫が氣を揉むからの、去つてくれさつしやい、それ、ちやつと〜。」といつて持つてる繪日傘の尖で下から一ツ突いて上げた。枝が揺れて、花片がはら〜と揺いだが、鳥はバツサリと飛んで流る、やうに低い處を颯と伸した。翼のさきで私の胸の處を掠めたと思ふと、貫くが如くうしろの花の繁の中へ、すつぽりと入つて隠れた。彼地からも、此地からも、一片二片、ひら〜として靜かに花片が縫れて落ちた。

「さあ、さあ、最うこれで可からうの。」

私が見返つた時、婆さんは繪日傘を横に置き、蹲つた膝から下をかくして、胸から上が日傘から出て見える孫の手を取つて、顔を眼鏡越しに見上げて居た。

小兒は黙つて合點々々をする下目づかひ、細りと眠つたやうに俯向いた、佛造りした愛らしい、ふくらかな頤の下へ手を入れながら、浮かすやうにして、眼鏡掛けた皺だらけの顔を傾けて、

「何うしたよ、何うしたよ、は、は、そんなに可厭ぢやつたか、然うかい。」

孫は撥つたさの堪へられないやうな顔色で、袴の長い、だらりとした肩に小動うたして、身を任せたやうに垂れて居る手を上げつ、頤を支へた婆さんの手をしつかり取つた。小さな掌へ、婆さんは片手で袂を探つて居た紙包の捻つたのを不意に引出して乗せて遣つて、

「さあ〜、一ツ食れ。お花見ぢや、お花見ぢや。」といつて、指の尖で一寸頬べたを突いたもの

なり。

小兒は又ばつちり嬉しさうに目を睜つて、

「これ、おばあちゃん、これ。」と捻つた處を撮むで上へ引いて見る。

「さあ〜、お開き、お開き。」といつて大口を開いて笑ひながら、忙しく二ツ三ツ自分で頷く。

紙包の中たるや、鹽煎餅。

「多度ねえ。」

「微塵棒や、鐵砲玉は毒ぢやよ。お腹が痛くなるからの、これが可からうと思つて買つて來た。

嬉しいか、お〜、と両手で孫の襟を搔合せて遣りながら、見惚れて居る婆さんは目がなくつて眼鏡ばかり。

三

此時、婆さんの前を、人が込むので押され〜、擦々に通つた婦人が三人。最後なのは双子づくめの銀杏返、團子球の根懸で、めりんす友染と縹子を打合せの帯、白足袋日和下駄で婢女なり。眞先なのは小紋縮緬の襲で縹珍の帯、柳腰ですらりとし、爪尖も見せない裾捌、お初形といふ根上りの丸鬘に金脚の笄、御新姐と見える風、鼻筋の通つた、色の白い、顔色が肖て居るから眞中



なのは其妹であらう、十七八の文金の高島田、艶々しう、毛一筋亂して居ず、濃い紫の三ツ紋の羽織を長々と着て居て、透通るやうな襟足、俯向きざまに顔を据ゑた、これは傍目も觸らないから氣も留めず、見もしなかつたが、前に立つた御新姐は通りすがりに見て、覗くやうにして、フト立停つて、われ知らず呟いた。

「おや、」

眞中の妹は、委細構はず歩行いたので、立停つた御新姐に路を遮ぎられて一緒になつて、並んで前へ出る、後からひよつこりと來た婢女に目で教へて、

「可愛いのね。」

「はい。」

一足あるいてまた振返つて、

「可愛いぢやあないか。」

「は……はい。」

「何だね、」といつて、なるほどだしぬけたつた、婢女は氣が着かなかつたらうと思つたが、御新姐は莞爾した。

「ほ、ほ、ほ。」

「ほ、ほ、ほ。」

一同に笑つたから妹は見返つた、其間に通抜けてまた先になる、御新姐、それから其妹、婢女はお供で、三人すらくと練つて縦横に織交ぜる人中で、小紋縮緬の袖、紫の羽織の襟、ちらちらと見えて遠ざかる。

「おばあちゃん。」

「お食りよ、可いから。」

「笑つたよ、私、可厭だあ。」

小兒は食べかけて手にした煎餅を口の端に持つたまゝ、あたりを向はして猶豫つた。人中でもの食べる意地汚なさを今の御新姐に嘲られたと思ひあやまつたさうな、婆さんは其心を得て、

「可、可、怒うしてお食り。」といつてくるくくと繪日傘を散りこぼれた花片の上へすらし、引廻して自分の傍から小兒の前へ押遣つて、櫻の際に立懸けながら、

「屈んで、屈んで、然う、然う。地が乾いて居るからの、直に腰を掛けさつしやいよ。」

同時に小兒の姿はすぼんと繪日傘の中ではまつて、さつきから蹲つて居た婆さんの眞白なそゞけ髪と、古風に剃り下げてちよん鬘を結つたつむりと、額をあつめたやうに並んで見える。

か！う！か！う！か！う！と近きあたりで鳥の聲。あの二人が樂みを妨げよう、間近く居たら



ば、自分で追つてやらうと見まはしたが黒い塊は見附からなかつた。前後に櫻五六株、いづれも咲亂れて香ばしくおつかぶさつてる、あちらからもこちらからも、心すとはなげに、ばら／＼ばらばらと一片、また三片、五片、六片、一かたまり、また一片、ちり／＼にこぼれかゝる花片が、下なる繪日傘にも、白髪の上へも、屈んだ背へも、地に敷いた花の上へも、もれて見ゆる草履のさきへも、軽く柔かに、しと／＼。

四

他の群集は目も留めず、私は心靜かに櫻の樹に倚りかゝつて、嬉しいやうにも、懐しいやうにも、悲しいやうにも、楽しいやうにも、教へられ、なだめられ、嫌され、慰められるやうにも感じながら、繪日傘を瞻つて、なかなる二人を心の内ですかして居ると、しばらくして、婆さんは花の下へ眞直に出て立つた。

いま屈みなりに吸ひつけて来たのであらう、口に煙管を啣へて、片手を背後にまはしながら、腰を伸し、仰向けに胸を反らして、アノ凸な、大な、眼かづら嵌はめたやうな眼鏡をきら／＼とさしてあつちこつちの花を見ながら、長閑かに一縷の煙を吹いた。ほつとしたやうな風情である。あゝ、向島では大夜具を着て、鬚巻を締め、するめ、茹玉子、慈姑の團子などを入れた目簪を

脇に掛け、一升徳利を繩からげにして手にぶら提げたのを、向うざまに突出して、小山の揺ぐやうに人交もせず飲むでは歩き、飲むでは歩き、果は酔倒れて、擦傷、剝傷で頬のあたり目の下、手の甲法、血だらけになつて砂煙の中に寝た親仁を見た。

傳馬に十四五人、二人で漕ぐ船頭の他には男を交ぜぬ乗合で、隅田の堤を中流へ漕ぎながら、紅の裏をひらりと翻すと、半纏を脱いで棄て、舷に出てすつと立つた二十五六の意氣なのが、前へ屈み、後へ反り、足を擧げ、腰を振り、さす手ひく手で唯一人、夕暮に躍つて居たのもあつた。

合羽紙を腰に巻き、地を掃いて、若いものが三人土堤を膝行ながら手を着いて、旦那さまや、おかみさま、といゝ機嫌で居たのもある。前に立つたは女房であらう、片裙を搔取りながら深張の蝙蝠傘をさして澄まし返つて押出すあとから、ばつたといふ身の及腰で、みせずがあびる砂ほこりを掃き／＼ついで行つた何處の國のか、髭の赤い、眼の碧い男もあり、爺さんは七ツさがりの黒紋附で手拭を肩にかけて行くあとから、其の手拭に両手をぶらさがつて、押着いて行く裏の赤い襦袢を着た婆あもあつた。婦人のきれいなのはいふまでもなく、男の立派なのは申すに及ばぬ。この花七日、櫻時、花に對する満都の趣味風俗は、驕奢、鬱憤、愚癡、亂暴、狼藉、沙汰の限、結構至極なの、言語道斷なの、お目出たいの、馬鹿々々しいの、狂氣染たの、愚劣なの、御



尤なの、をかしいの、飛でもないの、醜いの、哀なの、情ないの、つまらないの、烈いの、えらいの、じれつたいの、しやうのないの、錢のないの種々なのが、あらゆる中に、まあ、嘸娛樂な、嬉い、睦い、氣散じな、のどかなことであらうとこれは羨しかつたのである。

婆さんは、つくねんとして餘念なげに花を見て、煙草を燻らして居る、トや、あつて件の繪日傘のなかから、いたいけな手が鹽煎餅を掴むで、威勢よく上へ出た。

恰も敵將の首をあげて、討取つたり！と名告るが如く。唯見ると續いてまた可愛い、活潑な顔が仰向いてあらはれて、

「おばあちゃん、」

「おい、」とうっかりして居たので頓狂な聲。婆さんは煙管を持ちかへて上から見下ろした。

小兒はもう一呼吸、其の煎餅持った手を差上げて、

「おばあちゃん、おいしいよ。」

「然うかい、然うかい。」

「一ツあげませう。」といひかけて、顔を傾けたり、いたいけな。

五

婆さんは他愛なし、ほく／＼もので、

「それは、それは御馳走ぢや、一個お相伴をしようかの。」

と煙管を鼻紙にくるんだが、逆に取つて帯にさし、其ま、また繪日傘の蔭に蹲ふと、ぱら／＼と上からこぼれた。

か！う！か！う！ 何時の間にかまた来て上の枝の花のなかに潜つて鳴く。

「おばあちゃん？」と高聲で、小兒は日傘から飛んで出たが、鳥を追はうとして、ふと茫乎して前の方を見た。

ちやうど此時、遙に摺鉢山の方から推され／＼、人波が左右に分れて関と前後になだれて分れ、一條動物園のあたりをさして、颯と開けた落花の徑、小川が流れるやうに畝つた上を靜々と通る一行の貴女。

先達に一人煙突帽を頂いた、脊の高いのが、ナポレオンといふ髯を貯へ、長靴を穿いて革の鞭の細いのをうしろざまに、手袋をはめて逆手に取つて大跨に打つて行く。

少し隔てて腰元二人對の扮装、兩方から片手づつ曳いた幼い姫は、みどりのさげ髪房々と、五寸袖のかはり裏、ふつくりとして三枚、堆く裙を襲ね、堅矢の字に伊達巻の端長く靡いて、風に乘つたやうな足つき、かる／＼と、小さなゴム靴の踵うつくしく土もつかず、薄樺色に見えては



隠れまたかくれる、其のたびにゆらくとする髪ゆらぎ、日のひかりにつやくしく、小波に月をうかべたやう。

うしろから一人や、身丈の高い、おなじ年紀九ツばかりなのが、つむりは唐輪に結つたそればかり、殆んど同一やうなこしらへ。靴でなく、厚裏の雪駄穿。黒毛の磨いだやうなきれいな狎を兩袖で抱占めたのが、わき見をしちやあきよとくする頬に、綿のやうな頬をあてながら俯向いたなりで續く。ト婆さんが居る前を通つて、姫は弗と足を留めた。腰元二人曳いて居た手を放すと、胸の處に兩方から袖をかさねざま、振向いて、一寸狎を見て其ま、静々。

腰元も一所に見返つたが何を見ろといふいとまもなく、そくさ向直つて左右から身體を寄せ、姫のうしろに垣を造つて去つた、狎はのびあがつて姫の方へ天窓をもたげたが、また女の童の頬で押下られた。其あとに間を置いて、深張の蝙蝠傘少し斜にしたのに、顔は隠れて見えないが、襟筋の雪のやうな、引結めて櫛の齒のあざやかに通つた夜會結、手拭を膝のあたりで持つて、紅さしに寶玉入の指環を嵌めた品の良い婦人、二十の上を出まいと見えるに、黒勝なじみな服装。空色縮緬で引上げた紫紺の帯は何であらう、あるくたびに日がさして、黄金色を帯びた唐草が織物の底から幻のやうにキラ／＼と透いて見える。すかすと白綾の襟をかさねて居るが、あたりを構はず、すら／＼と小刻に歩いて來て、妙なもので、これもいま姫が何とはなしに歩行を留めた

處で立留り、蝙蝠傘を疊むと、威のある、鮮かな眉の寄つた、細おもてなのがむかうを見たが、俯向いて、手にした手拭で緊つた其口元を蔽ひながら、左右の人だかりに鋭い眼を配つて行かうとする。

「やあ？ おばあちゃん、やあ、お嬢さまだ。」と小兒はけたましくいつた。

六

「お、。」と、これも吃驚する、婆さんに構はず、小兒は兎の匆ねる勢で櫻の下を離れて出た。繪日傘は爪先にかけられて、仰向になり、くるりと一ツ舞ふと柄を天に朝してばかりとして口をあ

く。  
見た處では沈むた、氣の弱い、内氣の質のやうであつたが、何、猶豫ふ色なく、つか／＼と出て、いま行かうとする婦人を横合から、

「お嬢さま！」と呼びかけて、小兒はいそ／＼しながら、かくても立留まらないで二三歩歩を運んだ婦人について小走に歩いた。恰も引ずられたやうで、いきづかひ荒く顔を赤くしながらまた、

「お嬢様、お嬢様。」  
思はず立淀むた婦人の顔の筋は烈しく動いたが、じつと一目見たツ切、黙つて退かうとすると、



小兒は兩手で蝙蝠傘の尖をしつかりと取つて目を皿のやうにした。

口をおさへた手が下つて、氣強い、凛とした風采が、あれ心から弛むだと思ふ處へ、淺黄裏をぐいと端折つた馬丁が二人、四本の黒い足を入ちがへにつかくと來たのが打つつきさうになると、推出されたやうに婦人の身體は前へ出て、馬丁と一所にすらくと放れて、心ありげな顔の目のふちに色を染めて、馬丁の肩の上から此方を見越したが、其ま、姫のあとへ急いでしまつた。あとはまだ寄合はない瞬間花片で埋むだ徑の上に小兒は蝙蝠傘を兩手で攔むだま、失心の體でぼんやり立つて居た。婦人は持物を放して置いたのである。何かは知らず、一種の感情に打たれたトタンに、小兒はわつと泣出した。

「失禮、何うしたんですおばあさん。」と、思はず聲を懸けて櫻の中から出た、私と同時に人の中から躍然としてあらはれた、骨組の頼母しいのが、むかうで小兒の背をおさへて、

「泣くな！ え、泣くなよ！」とづんぐりした鏑のある聲をかける。と婆さんは慌たしく立つて其方へ行つた。まことに私の意味は餘り唐突で、しかも調子はづれであつた事に氣が着いて、婆さんの此方へ心着かなかつたのなるほどと思つたが、豪氣な男の出て來たのが嬉しくつて間近に進むだ。

「何うしたものでや、これ、おまへはまあ、泣くことがあるか、はて、他愛のない。」と、衛なさに

うに笑ひながら、口早にいひ慰めつ、婆さんは小腰を屈めて、

「はい、これはあなた、どちらの親方が存じませぬが。」

親方は小兒の背に手をかけながら、これをば聞き流しにいまはもう見えない、姫が一行を、おいらんの眼かづらかけたま、で見送りながら、

「いや、大した權高になりやあがつた。」

「もし、どちらの親方が存じませぬが、難有うござります。」  
と婆さんはまたお辭儀をする。

「ひでえ奴だ。餓鬼あ、何だと思つてやあがるだらう。」

「もしくどちらの親方が存じませぬが。」

「ごふ腹だなあ。チヨツ。」

「あなた、もし、親方。」

「畜生め！」

「もし、」

「やあ、婆さんか。は、は、は、笑ひなさんな、大人げない。飛んだ今日はおつきあひでの、」と、いひながら眼かづらをかなぐり取ると、苦み走つた俵なの。



目倉縞の半纏、腹掛、千草木綿の裏で上下裁下ろし。白足袋でつつかけ草履、舟のやうに反つた奴、上に長いのを羽織つて居る。銅色のしつかりした貫目のあるのが、目かづらを片手に、婆さんを見て、ニタリとして、

「私でげす。」

「まあ、これはツイお見それ申しまして。……」

「いや、笑ひなさんな花時だ、途方もねえ。お前も浮かれのやうだな。む、其氣で居るが可いや、結構だ。妙といふ奴さ。」と快げに笑つたが眉を寄せて、また動物園の方を遙に見た。

「いや、時にありや、何だな、つかみ料理の狂氣が家のお民の阿魔だらうな。さうだらう、む、違えねえ、餓鬼だ。」

「親方、御存じでござりますか。」

「あ、おいら、もうよつく知つてるが、婆さん、お前家たあ、海と山だ。何うして知己だ。」といひかけて、背後から見事な手をまはして、小兒の胸にならべて置いた。

「泣くな、見つともねえ。何だ、え、何うしたんだな。婆さん。」

「はい、それは何でござりますよ、親方にも毎々御最良になります、これが……」  
といつて孫を見て、

「さあ、泣き止むでよ、可いから。何でござりますよ。あ、やつて、納豆を賣つてくれますが、ツイあの邊にも参りますので、いつかお嬢様に御最良になりまして、毎度買つて戴きましたさうで。いつもあがります内に、坊や、お前の處は畠に近いさうだが、野原には、土筆だの、蓮華だの、葦だのが多度ありませうから、隙な時一束摘むで来ておくれでないか、ツておつしやつたと申してね、孫めが、あなた喜んで丹精して持つて参りました。」

あんなに持つて行つて、擴げては、土筆や、蓮華で、お座敷が野原になるだらうと思ひましたよ。何か、お縁側からお床の上にまで、お擴げなされて、嬉しさうにお眺め遊ばしたと、歸つてさう申して喜びましたことがございます。

四五日いたしますと、あすは商賣を休むのぢやと申します、何かお嬢様がお氣に入つて、破屋に遊びにおいでなさらうといふことで、孫がおともをして摘草をするといふ騒ぎ。

まあ、何より難有いことぢや。親類も、何も、つひぞこの兒の母親が亡くなつてからは、女氣一人も出入をしてくれぬに、いや、もう、何ういふ風の吹きまはしやら、下町のお嬢様、しかも大事なおとくいなり、あなたへお出入をするやうになつてから、孫も何やら嬉しさうで、宅へ歸



つてもいそ／＼して、口癖にいふのを聞いても、何んなに親切な、お優しい方か知れぬ。と私もそはそはとお待ち申して、草園子見たやうなものを心構いたしまして、孫と一所にてり／＼坊主をこしらへませうといふ他愛のなさで。

待ちました效に、あくる日はい、お天気。まだお晝御飯も戴きませぬのに、まだか／＼と待草臥れました。孫がお迎へに参りますと、お出掛けになります途中で、お會ひ申したといつて、婆ちゃん、お嬢様が、と鳴込みました。あとからお見上げ申しましたのが、あのお嬢様でございませ。

御様子の子の可い、おやさしい、品のある、はやもう拜みたいやうなお人柄、御挨拶を遊ばした上、お土産も戴きました。はじめは裏の垣根にござります、枸杞などをお摘みなさつて日あたりの裏田畝を、孫と二人でぶら／＼とおあるきなさる。お姿のなつかしさ。婆もおともをしましたが、其時でございます。」

といひかけて孫に向ひ、

「さあ、泣きやんで、え、泣くのぢやあない。泣くぢやない。」

八

「畠中の樹蔭のござります處へ、風呂敷を敷いてあげまして、休ませ申しました折に、何かと四方山のお話をしました序。ちやうど上野が盛だと申します、お花見はいかゞでござりますと申しますと、何かフトお氣に障りましたやうで、い、え、人なかには出るのが嫌、かうやつてお前さんたちと摘草でもして遊ぶ方が可ござんすつておつしやりました。」

お服装を見ますと、かう申しては、何か人様の目かたを引いたやうでござりましたが、そこはもう年寄で。

お年紀ごろなり、お住居の町處。は、あ、これは、お召がないのぢや。

御氣象から、とりなり恰好、人にまけず嫌ひ、權高なお方で、随分、まづ、まあ、派手な事のお好きな質、當世の學もなされたやうす、御器量といひ、何もひけはお取りなさるまい。

氣質から見れば何うしてなか／＼何うして、納豆賣の小僧や洗濯婆あにお目をかけられ、ものをおつしやらうといふ方ではないに、かうやつて遠方へわざ／＼お運びで、地の上へ腰をかけて嬉しさうにしていらつしやるが。なるほど我慢に我慢をなされて、まあ、今さしあたりあなたの氣には、別に深くかういふ狀を情ないとも思ひはなさるまいが、それは御自分でも、知らず知らず忘れておいでなさるといふもの。

自分で御自分のお氣質さへ、忘れておしまひなさるまでには、いかいこと、定めて、まあ、苦



勞を遊ばしたことであらうと、何かハヤ私は貧乏人を敵のやうに思召すお方が、戦に負けて、擄になつて、しやうことなし此方人等づれにお優じう遊ばすものやうに存じまして、御氣質が御氣質だけに、味方の大將が落人になつたより、一倍おいたはしいやうに存じて、ほろりといたしましてございませうがね、親方。一昨年のご事でございませう。すつと大きくおなりなされて、一寸はお見違へ申すやうでございませうが、いや、お顔立なり、おこしらへなり、いまお見え遊ばした、あの、お姫様に違ひはござりませぬ。

矢張お腰元附添ひで、其時はお忍びか、唯今のやうに仰々しいおひろひではござりませなんだが、ちやうど私ども休むでをりましたあたりを、摘草しておいであそばし、いつの間にか近くにござつて、お見馴れ遊ばさぬ私たちを人めづらしいと思召したか、まだ、お五歳か、お六歳の、いたいけな、御機嫌のい、お顔色で、しとやかにお越しなされ、遠慮なしに私どもの、ならんだ前へお立ちになり、何かおつしやりたさうな御容子に見えましたが、はしたなうはものもおつしやらず唯莞爾遊ばした。おみなの立派さ、綺麗さ。それはもう後光がさすやう、難有いやうで、嬉しいやうで、勿體ないやうにも存じましたに、お嬢様は、何とお思ひなされたやら、(坊や!)と、まあ、さも懐かしげにおつしやりましてね。目をくるくくやつて姫様を拜むでをりました孫の顔に、ひつたり頬すりをなさると思ふと、(軽いことね、)といきなり抱上げて、すつくりと立つて、

姫様をきつと御覽じた。

お顔は險なり、威がありますなり、お召はいかうやつれてなり、白縫ものがたりで讀みました、大友の若茶姫と申すそのおもかげに見えまして、何か、ねたみと、うらみと、腹立で、敵の姫君を睨むやうで。身を寝した、おちぶれた、立派な謀逆人のやうでございましてつけ。おほ、他愛もないことを」といひかけて婆さんは微笑に笑つた。

親方はまんじりとして聞いて居る。

九

「かやうな言がかりがござりますと、御運めでたくと申さねばなりませぬ。お腰元があたふた参つて、姫様を連れて退きましたか、何やらもの懐かしげに、あの謀逆人の嬢様を見返りくしていらつしやいました。何かの御縁でございませう。半年も経ちますと、あなたの料理の店が閉つてお嬢様が何處へかいつておしまひ遊ばしたと申して、これが、まあ、母親に分れました時のやうに、はらくいつて騒ぎますので、内證で聞合はせますと、こゝが因縁でございませうよ、親方、まあ、何うでございませう。

姫様が其時から、他に人もないやうに、あのお嬢様をお慕ひなされて、これがお年紀ごろなら



戀煩こひづらひを遊あそばさうといつたおむづかりやう。清洲きよすさまの一粒種ひとつぶだね、そんなに欲ほしがらるなら目を眠ねむつて、ちやとてもと親御おやごさま様は思召おぼしめすのに、聞きけば、高等かうとうとやらの學問がくもんも遊あそばしたさうなり、舊もとはお旗本はたもとと申まをすので、金かねなら惜をしまぬとばかりお附人つきびとに御懇望ごこんぼう遊あそばした。

丁度ちやうど父おともお亡なくなりなされたと申まをすことで、御殿ごてんへおあがりになつてからは、姫様ひめさまおよるにもおひるなるにも、お嬢様ぢやうさまでなうてはなりません大層たいそうなお氣きに入いり。お姉様あねさまが一方出來ひとかたできたやうな勢いきほひちやと承うけたまはりました。さやうなわけなら、それもう此方人こなたら等らづれのことは思出おもひだしも遊あそばすまいに、とかくこれが忘れ得わすれませいで、寝ねても覺さめても、お嬢様ぢやうさまは、お嬢様ぢやうさまはと申まをしてはむづかりまするで、もしまた、つか／＼と御門ごもんへでも參まゐつてはなりませんと存ぞんじますから、つい今いままでもお住居すまひを申まをさずに居をりました。ひよんな處ところで、飛とんだ羽目はめになりましたのでございませぬ。なあ、坊ぼうや、あの、お嬢様ぢやうさまは、うまれつきの謀逆人ひはんじんぢや、疊たたみの上うえで死しなうとは思おもはしやらぬお方かたぢやに、さうさう、いつまでも／＼、懐なつかしがつてはなりませんせぬ。もし、親方おやかたあなたも御存ごぞんじでございませぬか。

親方おやかたは頷うなづいて、

「いや、婆ばあさん、何かなにをかしいことをいふが、全く然まうかも知しれねえてえなア何なにしろア親仁おやぢからがたゞものでねえ奴やつよ。舊もとアその旗本はたもとだつて、口くちに贅澤ぜいたくをしたさうで、しやうことなしに、ソ

レつかみ料理れいりをはじめ居をたわ、旨旨くもへんてつもねえけれど、客きやくが誂たがへたものを食くひ残のこして歸かへつたといつちやあ、青筋あせぢを立てやあがつて、町人ちやうじんめ！折角せつかく骨ほねを折をつて拵こしらへてやつた料理れいりを、食くべ残のこして歸かへりをつた。無禮ぶれいな奴やつだ、も、んぢい、彼奴あいつが來きたら今度こんどから斷ことわつちめえ！といふ變痴へんち氣きな老爺おやぢだから、おいらあ氣きに合あつて、ちよく／＼行いつた。

前垂まえだれがけでアノ娘ごにお給仕きよじをさせる奴やつよ。一體料理いったいれいりツてえなあ、氣きでもつて喰くはすんだから、給仕きよじが心得こころえがねえと、客きやくの前まへへ持出もちだすまでに段階だんばし子こで味あじを損そねるツていはあ、其處そこで女むすめはおれが氣きを受けてるからそれでさせるんだつてえことよ。他ほかのものにさせちやあ旨旨くねえツていつたものだ。

此奴こいつあ大おほきに然さうかも知しれねえて。旨旨えも、旨旨くねえも、近ちかまはりの奴等やつら、まあ、あの女ごがあるで食くひにもいつたといふもんだ。臀むしきのいつかい、踵かかとの黒くろいのもやつて見みねえ。汚きたえ二階にかいへ猫ねこの兒こだつて寄よつくのぢやあなかつた。

そのくせ祝儀しゆぎなんざ頂いたかうといふ柄がらぢやあねえ。何どうしてお前まえ、いつかも金きんの奴やつアのそ／＼と上ありやあがつて、彼奴あいつケチな野郎やろうさ。一間ひともきやねえ二階にかいを、はじめのことなり、一人ひとりぢやあ廣ひろ過ぎるツて、情なさけねえ遠慮えんりよをしやあがつて、次つぎの室むろに入いらうと思おもつたさうで、がた／＼やつて襖ふすまの戸とをあけると、蜘蛛くもの巢すと、鼠ねずみの糞ふんだ。おや！と呆あれる處ところをふんづかまつた。お民たみが親仁おやぢア血相けつさう



を變へて居たといふぜ。」

十

「聞かつせえ、婆さん。下階から驅上つて、いきなりふん掴めると、無禮者め！ 娘に客でも取らすかと思つて、うそ／＼寢床を探したな、何だと心得る。素町人！ おのれ唯置く奴ぢやあねえつて、柔術をかけて占め上げられて、金の野郎、赤坂並木の彌次郎兵衛といふもんだ、氣を遠くした處へ、女が出て来て顔を赤くして宥めたのでやう／＼一命を助かりよ。そんな風だから、貧乏するなあ當前だ。何しろ氣がふれてたにやあ違えねえ。豪傑なことをいふ癖に、女におはれのねえのを恐ろしく氣にしてな、見つともねえからつて、何處へも出さうたあいはねえ。女がああ見えても生意氣ぢやあなかつたんで、大の親おもひよ。人に誘はれようが、何うしようが、寄席へ一ツ行くんぢやあねえ。するとまた親仁が可哀相だといつちやあ鬱ぐ。何も衣類がないせるで出ないのぢやありません。父上に働がないから、人に誘はれても斷るのだから、お僻みなさいますなら、私やいつて参りますつて、何處かへ偶に出ようもんなら、え、！ 裾の切れたどんつくを着て、人中へ恥を曝しに出る、つらあてがましいといつちやあ、怒るといふ大難物で、あの女ア泣かされ抜いたものだ。」

さうかつて、定連から貢がうといやあ、物貫ぢやねえぞといふ口だらう。打ちやつて置け。いまにアノ頑固親仁が亡くなつたらお民が一生のつかれやすめだ。あいつが身體へ金箔でも塗つて、お祭の山車にして曳いてやれ。容色も心だても外様にやあねえ、町内の自慢だつて皆がいつて居たが、さうだ、一昨年だ、おたみも恐ろしく取亂してしまつて、見つともねえてんで、親仁の奴あ、門口へも出さないで置いたが、いつかの晩、酒を買つて來いつて出してやつて、辻まで行つた處を、あとから恐ろしい劍幕で追つかけてつて、お前、たぶさを掴むで大道をひきすつて歸つたぢやあねえか。

繪口傘

しまひ湯で茹たやうななりをして、おもてへ出あるいて、親の恥を曝しをつたつて、お前、額の疵は其時についたんだつてよ。庖丁の背で打割つた。女も死んだやうになつて倒れて居たさうだが、其夜半だ、とう／＼十文字にかッ割きやあがつた。來たり！ いや／＼お祭だ。しつかりやつてお民坊尊と奉るべい、最初御堂から建立しろ、屋臺骨を直して、素敵な料理屋を拵へてやれつていつてた中に、御殿へすば抜けとやりやあがつたんだ。可いや、親爺が居りやそれもさせめえ、何もあの女の心任せだ、しかし名物を無くなしたつて、皆で惜がつて居たんだに、あの様あ何だ。おござりたてまつる姫様が襟に着きやあがつて、聞きや、そつと位の因縁ぢやあねえやうだに、久しぶりで逢つた此の兒に言さへ交はさねえ。畜生、見下げ果てた代物だ。あまりの



澄し様あ、氣にくはねえから、のさり出て、一捻り捻つてこまそと思つたけれど、若い奴等大勢  
隨いてるから、事出来したと思つて止した。構ふことあねえ。やい、三吉、己が町内へ來い。面  
當だ、今度ア三吉大明神と崇めてやらう。縮緬でも扱いてな、向鉢巻でよ、鐵棒でも引いて一番  
に駆け出すだ。糞をくらへ、大鐵が尻押だ。威勢が可いぜえ。手前の萬燈はおいらがな小屋根よ  
り高え處へ差立ててお供をしてくれる。明神様のお祭にやあ、べらぼうな景氣だぜ。おう、そん  
な蝙蝠傘なんざ、打遣つちまへ、ろくでもねえ。なあ、婆さん。」  
「然うでございませすとも、親方ありがたうござります。謀叛人の大將に掛つて居ては、未始終可  
かあない。ちやつとそんなものは放らつしやい、の、可か、可、さあ、これを、といひかけ  
て婆さんが心着いて取りに戻る、此繪日傘の前まで、聞惚れて進むで出て居た私は、思はず手に  
取つて、

「これですか。」といつて、柄を取つて差出したが、不意に驚いてじつと目成られた眼鏡の光にヒ  
ヤリとした。あ、清洲の姫の保母、民子を謀逆人だと看破した、此の可恐しい老眼鏡に、自分  
が探偵であることを洞察されまいと思つて、繪日傘を渡したま、そ、くさして踵を返した。

物語は、恠ばかり早く纏まらうとは知らなかつた。私はそれから屏風坂の邊、博物館の前あた  
り、ぶら／＼して時を消し、見晴の方へ出て來ると、こ、へ人の瀬を造つて廣小路の方へ樋の口  
を落したやうに頹れかゝる。

清水堂の下から出た二頭立の馬車が、三橋の際で、婆さんを一人挽いたといふので。  
繪日傘をさして、眼鏡を懸けたそれではないか。小兒が烏鳴を氣にしたが、と心ならず、渦巻  
くやうな人なかを潛り／＼、石壇の上へ來た。  
馬車路から池の端、見附の黒門町から懸けて、三橋の際は黒かたまり、立錐の地もない人だか  
りで、たとへば獲物の上を蟻で塗りかためたやうな、他は行違ひ、入違ふ其列だといつても可か  
らう、あの、眞黒な處にと思ふ馬車の際は人で埋まつて、其の母衣の尖少し見えたが、丁度石壇  
へ下りかけた時、中空で高く、金筋の入つた煙突帽が一個、翻つて飛んだ。今轢殺したま、駆け  
出して行く二頭立の馬車を、七八十人一團だつた職人が鯨波を造つて追留めた、采を掉るのは大  
鐵だと、口々にいふ一句づつ連續したのが、早や此處まで聞えたので、さては轢かれたものと思  
ひあたつた。トタンに八方から推詰められて、あぶんで出たやうに人の頭の上へこれは帽を着た  
ま、で、横様に御者が擔ぎ上げられたが、一齊に作つた鯨波の中へ、またづぶ／＼と沈むで見え  
なくなる。



間もなく、柳の大路の両側へ、一列に砂煙が眞赤になつて颯と立つたが、中ほどで縦横に亂れて、濛々として、がう／＼といふ人聲、砂煙が末濃に靡く、遙にむかひなる瓦屋根に摺れ合ふばかり、まじぐらに驅けるは二頭の馬で、行途には疾く十四五人入亂れた警官が、俯向けになつて驅け着ける。

目を遣る隙なく一頻また鯨波を揚げたと思ふと、馬車が横倒れになつた。群集の胸のあたりへ車輪が廻つて出たと見て取る時、紅、紫、萌黄のいろ／＼、色彩ある鳥が立つたやう、中から美しい婦人がこぼれた。

それと見る間に、殺せ、疊めといふ聲々。取巻いてをめて居た一團の頭は一齊に此方に向いて、海嘯のやうに寄せて来る。

石壇から崩れかゝる人数と、下口で入亂れる中を、摺れつ、縛れつ、彼方へよろめき、此方へよろめき、立足もなく追ひ廻される婦人があつたが、咄嗟の間、バツタリ俯向けに倒れたと思ふと、またわツといふ鯨波の聲。一度折重なつたのが八方へ飛退く下から、匆返してすつくと立つた。

あツと口々に叫び立てて、何うしたのか、下り立つた群集が、逆に石壇へ驅けて上るのを、追さまにすた／＼と上つて来て、途中で、恰も、恚云ふ時には物馴れて、落着いて、片際に身を容めて居た私を、二間とは隔てぬ處で、膠で着けたやうに足を留めたのはお民である。眉間の疵の痕に血が染んで、顔は眞白なのに蒼みを帯びて、前髪が分れてかゝつた夜會結を背へ亂し、紫紺の帯を引いたのが、石壇に垂れて、踏占めたあらはな脛を、一纏巻いて居る。左手に抱いたのは姫で、これは眞俯向けた額を保母が胸に押着けて、しつかりと手を頸に搦むで居た。引裂けて手の甲にぶらさがつた袖口の下なる白い手の中、的礫と光るものは佛蘭西形の貴婦人持の短銃である。

何さまこれに怯むだな、見物は上へ退き、仕手の人数は石壇の下に宛で鮫を壓したやう、手を舉げ、足を踏み、矢聲を懸けながら近き得ない。尤も上なのは、幾萬人皆唯物見高な其であるから、意としないで、お民は捻向きさま下狙ひに銃口を向けて、急しく肩で呼吸を吐いたが、またほつと溜息をした。毗の切れた險のある目で、屹と八方を眈しながら、

「三ちゃん、三ちゃんは居ませんか、三ちゃんは居ないの。お婆さんの孫は何うしました、三ちゃん！ 三ちゃん！」と張切つた聲で繰返して呼んだ、聲に應じて、群集の中から、三吉の手を曳いて、ぬつくと動き出て、一人つか／＼と石壇をのぼつたのは大鐵である。半被の片腕を巻上げたばかり、裾を引上げもしないで、恐気もなく短銃の前へ出て仁王立になつた。



お民は瞳を据ゑて、じつと三吉の人心地もなげな顔を見たが、短銃を構へた臂を曲げて、下に垂れると、横ざまに姫の耳へ口をつけた。

「姫様大丈夫です。」といつて、片手抱に抱き下ろして、

「其處に居る兒と、しつかり手を曳いておいでなさい。お放し遊ばすと、殺されますよ、可ござんすか。」といつて手を放した。

「ね、いつまでも手をお曳き遊ばすんですよ、お離しなさいますと、人は何うでも私が何處からか出て參つて、姫様貴方のお生命を取りますから、屹度ですよ。」といつた時、姫は殆ど夢のやうに三吉に縋り着いた。言ふことは肯くやうに、かねてお民が爲置いたのであらう。

見澄まして、白魚のやうな手で垂れさがる黒髪を拂つたが、颯と眼のふちを染めて血の色を返した。口元に微笑むで、帯を抱へ上げたと思ふと、胸も、雪のやうな足も、亂れたなり、細い指に短銃を挟むだま、俯向いて、片手で顔を隠しながら力なげに石壇を上へ登つた。驚いて見ると、群集が哄と左右に頽れて開く一條の路の中へ入つて後髪は臆て紛れて見えなくなる、お民は静々と落ちて行く。

上野の鐘、不忍の池の水、大路の柳、花の山。繪日傘の相合傘で、姫は三吉と並んで石壇を下へ降りた。遠近にこれを見た、老若男女無慮幾萬。

## 立 春



「父様、母様、私は今日から十八になりました。」  
思はず雪に手を着いたが——と両親の無い人は私に語つた。  
山の中で、掌が並んで雪の上に印された。雪には限らず、泥にでも、這麼跡が着くと、其手を  
魔が曳いて導く、と聞いたから、袂で消して衝と立つて、遙に、眞白な谷の向うの峰の方を仰ぐ。

二

毎年元日、祖父の墓に参詣するのが父の例であつた。一昨年其の亡つた後、私が代つたので、  
父も母も同一處に葬つてある。

墓と思ふ處の、少し小高く見えたのは、氣の所爲であらう。山は唯雪で、あたりに生きたものは  
何もない。

麓から、此處に來る間に、出逢つたものは、唯一頭の瘦せた犬で、奥山の雪が日に日に深くな  
るに従つて、恰も洪水の力で、巨大な石が川上を流れて來るやう、狼が一ツづつ次第に里近く押  
出されると言ふことを聽いて居たので、可恐かつたから、其の毛色も見なかつた。が、立窘んだ  
傍を通つて、路を除けて、西の方、天神山の森の方へ、弓形に大きく雪の上を驅けて行つた。

見返りもしないで走つて來たが、足跡は其處から二筋に分れて居よう。一筋は麓の方へ、一筋  
は森ある方へ。……見返れば又それから此處まで、一筋、飛々に、草鞋で踏んで來た足跡が、果  
しなく續いてゐるが、身の周囲のは大きく入亂れて、良離れたのは正しく片足づつ入違ひに、雪  
は刻々な角を立てて窪んで居る。遠くは唯一筋白い絲。

三

心寂しいので、又墓の方に向つて御名を唱へた。

其の墓を、二町ばかり隔つたところに、峰の堂が一つある。

爺の堂守が、其の子の嫁と二人で籠つて居るが、元日の此の墓參の時に限らず、盂蘭盆、又祥  
月命日などに登山の都度、堂に寄つて懃ふのが例で、爺は、山男、狼、猿、兔、木靈などの、  
怪しく、奇しく、珍しい話をしてくれる。……

立 春  
嫁は餅を炙つてくれた、栗を剥いてくれた……可懐い、冷い足袋を脱がせて貰つて、早く爐の縁



へと思つて来たのに、丁度目の前五六間の處、山懐の峯路が、上の峰から、一雪顏に谷の底まで降積つて、爪尖を懸ける凸凹もなく、團栗の枝の葉もないので一足も進まなかつたのである。あはれ、堂に籠つて此雪に埋るゝ二人。爐のある次の間に何時も私を通してくれる、那の六疊の南の小窓一つ開けても見よ。雪の山に、四角な黒い穴が開いて、其の美しい顔が覗くであらうのに、と思ふ時、ふと其の六疊の間の、紙で貼つた天井の渦巻のことが胸に浮んだ。墨繪の渦巻は、なにかしの繪師が描いたといふ、手拭に濃い墨を絞るばかりに含ませた一筆で、打付けた、其の筆を起した處が、龍の頭の形になつて、勢餘る墨の飛沫は、其處とも分かず、一面に逆り、猛然として凄じい。下の疊はいつも青々と綺麗な、我も人も馴染の一室。

然し、峰の堂の天井の渦巻は黒いが、裏の戸を一枚開けると、山の奥は吹雪の白い渦であらう。其の渦が重り又重る空の、巻いてゝ、渦を巻いて段々奥深くなる方は、白山よ、大汝よ、御前ヶ嶽よ、劍ヶ峰よ、石炭のやうな黒雲の中から、すらゝと研出した如く、白刃を交へて現れて居るが、山は近いほど、間近なほど、次第に薄雲のどんよりとなつて、南下りに金澤の町、海の方は蒼い空。

四

一月元旦、不斷着のまゝ、羽子を突いて居た、十二三なのが二三人門口に立つた中を通つて来た。大通の商賈は未だ一樣に戸を鎖して居たが、今は早や、兩側の家の軒毎に、國旗が翻へるのが、ちらゝと遙に望まれて、車の響と、人聲と、凡そ、胸に浮ぶほどの元旦のものの氣勢が廣い空気を傳はつて、一人雪の中に立つてる耳に響いた。

眺めて佇む、身の周囲は極めて寒い、嵐が吹く毎に、降るとしもない雪がひらゝと來ては袂に觸る、爪尖は氷のやう、私は歸りかけた。

正月はどうかまで、

からゝ山の下のいたまで、

土産は何ぢや、

榎や、勝栗、蜜柑、柑子、橘……

此時いとせめて、あはれな、冴えた、且つ細い、透る、幼い聲で唄ふのが山の中に聞えて、木靈に響く。

耳を澄すと谷の底、それよ、藁屋根に厚い雪を被つた、土人の家が、戸を見せ、背戸を見せ、ふつくりして横に長い垣根を見せて五六ある。

あゝ、雪に埋もれた、白い墓の中で唄ふのであらう、其聲は、魔が、拘へて來た兒に唄はせる



やうにも聞え、又山姫が、女童に唄はせるやうにも聞え、聖の膝下に新發意が唄ふやうでもあり、継子が唄ふやうでもあり、腕白が喚くやうでもあつた。が、故郷の兒等は皆師走に入つて、半頃から吟するので、私はこれを幼い時、戸外で、雪丸げをして體は皆氷のやうになつて赤くなつて、晩方内へ歸ると（御覽、惡戯が過ぎますから。）と火鉢の上で母親に手を握られつゝ唄つたのである。

五

「もう十八になりました。」と思はず俯向く……目に入つたのは、雪にさした一把の花。  
水仙、梅の枝など取添へて、之は下から買つて来た。丁度、山の裾を流るゝ大川の橋を渡つて、坂の取着に来る觀音町と云ふのを出脱れる處に、石の地藏尊が七體、手ん手に珍しい、一束の稻を提げた七ツ地藏といふのがある。——今年は國々豊穰だつたけれども、去にし飢饉の時、徒黨を組んで此の山の巔に推登つて、城内の藩主の寢耳に響くやう、一齊に聲を放つて泣いた。爲に倉庫は開かれて、幾多の貧民は命を繋いだが、重立つた者七人といふのが刑に處せられた、其記念なので、地藏堂の傍に花を賣る店がある。其門を出て立向ふと、直ぐに此の抱いてあがるやうな雪の山。

其の主の婆さんから買つて来た。例年、其の時分には未だ何處も市では店を出さぬので、父の代も、花は其處で買ふのであつた。蓋し、其の七ツ地藏を境として、五六の山家も麓の小家も、郡部に屬して、正月は舊曆を用ふるのであるから、

正月はどうこまで、

から／＼山のしいたまで。

と又繰返す、苧環の絲の纏れ／＼で、峰から谷、一山を膝つたやうに聞えるのに引留められながら、斷ちもやらず、その、黒い渦卷ある部屋、吹雪の白い渦卷のある奥山の方を見返つては、俯向き／＼引返す、……空は、下りるに従つて次第に晴れて、日の御旗は大きく鮮明になつた。

六

麓で又、花屋に休んだ時。

「もう今年あたりから、坊様達と一所のお正月にいたしたうござります。」

と、婆さんは言つた。而して爾時、花屋の背戸に迫る、山續きの蛭を落つる、雌瀧の音、雄瀧の音が、二筋聞えた。此音は、市と一所に、此の山へ正月が来るやうになつても聞えよう。



三尺角



「……………」  
 山には木樵唄、水には船唄、驛路には馬子の唄、渠等はこれを以て心を慰め、勞を休め、我が身を忘れて屈託なく其業に服するので、恰も時計が動く毎にセコンドが鳴るやうなものであらう。また其がために勢を増し、力を得ることは、戦に鯨波を擧げるに齊しい、曳々と一齊に聲を合はせるトタンに、故郷も、妻子も、死も、時間も、慾も、未練も忘れるのである。  
 同じ道理で、坂は照る／＼鈴鹿は曇る／＼といひ、拾遣りたや足袋添へて／＼と唱へる場合には、いつれも疲を休めるのである、無益なものおもひを消すのである、寧ろ苦勞を紛らさうとするのである、憂を散じよう、戀を忘れよう、泣音を忍ばうとするのである。  
 それだから追分が何時でもあはれに感じらるゝ。つまる處、卑怯な、臆病な老人が念佛を唱へると大差はないので、語を換へて言へば、不殘、節をつけた不平の獨言である。  
 船頭、馬方、木樵、機業場の女工など、あるが中に、此の木挽は唄を謡はなかつた。其の木挽

の與吉は、朝から晩まで、同じことをして木を挽いて居る、黙つて大鋸を以て巨材の許に跪いて、そして仰いで禮拜する如く、上から挽きおろし、挽きおろす。此度のは、一昨日の朝から懸つた仕事で、ハヤ其半を挽いた。丈四間半、小口三尺まはり四角な樟を眞二つに割らうとするので、與吉は十七の小腕だけれども、此業には長けて居た。

目鼻立の愛くるしい、罪の無い丸顔、五分刈に向鬚卷、三尺帯を前で結んで、南の字を大きく染抜いた半被を着て居る、これは此處の大家の仕着で、挽いてる樟も其の持分。

未だ暑いから股引は穿かず、跣足で木屑の中についた膝、股、胸のあたりは色が白い。大柄だけれども肥つては居らぬ、ならば袴でも穿かして見たい。與吉が身體を入れようといふ家は、直間近で、一町ばかり行くと、袂に一本暴風雨で根返して横様になつたまゝ、半ば枯れて、半ば青青とした、あはれな銀杏の矮樹がある、橋が一個。其の澁色の橋を渡ると、岸から板を渡した船がある、板を渡つて、苦の中へ出入をするので、此船が與吉の住居。で干潮の時は見るも哀れ、宛然洪水のあとの如く、何時棄てた世帯道具やら、缺挿鉢が黒く沈むで、蓬のやうな水草は波の隨意靡いて居る。この水草はまた年久しく、船の底、舷に翳み附いて、恰も巖に苔蒸したかのやう、與吉の家をしつかりと結へて放しさうにもしないが、大川から汐がさして來れば、岸に茂つた柳の枝が水に潛り、泥だらけな笹の葉がびた／＼と洗はれて、底が見えなくなり、水草の隠れ



るに従うて、船が浮上ると、堤防の遠方にすく／＼と立つて白い煙を吐く此處彼處の富家の煙突が低くなつて、水底の其の缺挿鉢、塵芥、檻襪切、釘の折などは不殘形を消して、蒼い潮を満々と湛へた溜池の小波の上なる家は、掃除をするでもなしに美しい。

爾時は船から陸へ渡した板が眞直になる。これを渡つて、今朝は殆ど満潮だつたから、與吉は柳の中で燬と旭がさす、黄金のやうな光線に、其罪のない顔を照らされて仕事に出た。

二

其から日一日おなじことをして働いて、黄昏かゝると日が暮き、柳の葉が力なく低れて水が暗うなると汐が退く、船が沈むで、板が斜めになるのを渡つて家に歸るので。

留守には、年寄つた腰の立たない與吉の爺々が一人で寝て居るが、老後の病で次第に弱るのであるから、急に容體の變るといふ憂慮はないけれども、與吉は雇はれ先で晝飯をまかなはれては、小休の間に毎日一度づつ、見舞に歸るのが例であつた。

「ぢやあ行つて來るぜ、父爺。」

與平といふ親仁は、涅槃に入つたやうな形で、胴の間に寝ながら、佛造つた額を上げて、汗だらけだけれども目の涼しい、息子が地藏眉の、愛くるしい、若い顔を見て、嬉しさうに頷いて、

「晩にや又柳屋の豆腐にしてくんねえよ。」

「あい」といつて苦を潜つて這ふやうにして船から出た、與吉はつと立つて板を渡つた。向うて筋違、角から二軒目に小さな柳の樹が一本、其の低い枝のしなやかに垂れた葉隠れに、一間口二枚の腰障子があつて、一枚には假名、一枚には眞名で豆腐と書いてある。柳の葉の翠を透かして、障子の紙は新らしく白いが、秋が近いから、破れて煤けたのを貼替へたので、新規に出来た店ではない。柳屋は土地で老舗だけれども、手広く商をするのではなく、八九十軒もあらう百軒足らずの此の部落だけを花主にして、今代は喜藏といふ若い亭主が、自分で賣りに廻るばかりであるから、商に出た留守の、晝過は森として、柳の蔭に腰障子が閉まつて居る、樹の下、店の前から入口へ懸けて、地の窪むだ、泥濘を埋めるため、一面に貝殻が敷いてある、白いの、半分黒いの、薄紅、赤いのも交つて堆い。

隣屋は此邊に棟を並ぶる木屋の大家で、軒、廂、屋根の上まで、葺と木材を積揃へた、眞中を分けて、空高い長方形の透間から凡そ三十疊も敷けようといふ店の片端が見える、其の木材の蔭になつて、日の光もあからさまには射さず、薄暗い、冷々とした店前に、帳場格子を控へて、年配の番頭が唯一人帳合をしてゐる。これが角屋敷で、折曲ると灰色をした道が一筋、電柱の著しく傾いたのが、前と後へ、別々に頭を掉つて奥深く立つて居る、鋼線が又半だるみをして、廂よ



りも低い處を、弱々と、斜めに、さも／＼衰へた形で、永代の方から長く續いて居るが、圖に描いて線を引くと、文明の程度が段々此方へ來るに従うて、屋根越に鈍ることが分るであらう。

單に電柱ばかりでない、鋼線ばかりでなく、橋の袂の銀杏の樹も、岸の柳も、豆腐屋の軒も、角家の堀も、それ等に限らず、あたりに見ゆるものは、門の柱も、石垣も、皆傾いて居る、傾いて居る、傾いて居るが盡く一様な向にはなく、或ものは南の方へ、或ものは北の方へ、また西の方へ、東の方へ、てん／＼ばら／＼になつて、此風のない、天の晴れた、曇のない、水面のそよ／＼とした、静かな、穏かな日中に處して、猶且つ暴風に揉まれ、揺らるゝ、其の瞬間の趣あり。ものの色もすべて褪せて、其灰色に鼠をさした濕地も、草も、樹も、一部落を蔽包むた夥多しい材木も、材木の中を見え透く溜池の水の色も、一切、喪服を着けたやうで、果敢なく衰である。

三

界限の景色がそんなに沈鬱で、濕々として居るに従うて、住む者もまた高聲ではものをいはいない。歩行にも内端で、俯向き勝で、豆腐屋も、八百屋も黙つて通る。風俗も派手でない、女の好も濃厚ではない、髪飾も赤いものは少なく、皆心するともなく、風土の喪に服して居るのであらう。

元來岸の柳の根は、家々の根太よりも高いのであるから、破風の上で、切々に、蛙が鳴くのも、欄干の壞れた、板のはなれ／＼な、杭の抜けた三角形の橋の上に蘆が茂つて、蟲がすだくのも、船蟲が群がつて往來を駆けまはるのも、工場の煙突の煙が遙かに見えるのも、洲崎へ通ふ車の音がかたまつて響くのも、二日おき三日置きに思出したやうに巡查が入るのも、けた、ましく郵便脚夫が走込むのも、鳥が鳴くのも、皆何となく土地の末路を示す、滅亡の兆であるらしい。

けれども、滅びるといつて、敢て此の部落が無くなるといふ意味ではない、衰へるといふ意味ではない、人と家とは榮えるので、進歩するので、繁昌するので、やがて其電柱は眞直になり、鋼線は張を持ち、橋がペンキ塗になつて、黒堀が煉瓦に換ると、蛙、船蟲、そんなものは、不殘石灰で殺されよう。即ち人と家とは、榮えるので、怒る景色の俯がなくならうとする、其の末路を示して、滅亡の兆を表はすので、詮するに、蛇は進んで衣を脱ぎ、蟬は榮えて鼓を棄てる、人と家とが、皆他の光榮あり、便利あり、利益ある方面に向つて脱出した跡には、此地のかゝる俯が、空蟬になり脱殻になつて了ふのである。

角尺三、敢て未來のことはいはず、現在既に其の姿になつて居るのではないか、脱け出した或者は、鳴き、且つ飛び、或者は、走り、且つ食ふ、けれども衣を脱いで出た蛇は、残した殻より、必ずし



も美しいものとはいはれない。

あゝ、まぼろしのなつかしい、空蟬のかやうな風土は、却つてうつくしいものを産するの、柳屋に艶麗な姿が見える。

與吉は父親に命ぜられて、心に留めて出たから、岸に上ると、思ふともなしに豆腐屋に目を注いだ。

柳屋は浅間な住居、上框を背後にして、見通の四疊半の片端に、隣家で帳合をする番頭と同一あたりの、柱に凭れ、袖をば胸のあたりで引き合はせて、浴衣の袂を折返して、寢床の上に坐つた膝に搔卷を懸けて居る。背には綿の厚い、ふつくりした、堅縞のちやん／＼を着た、鬱金木綿の裏が見えて襟脚が雪のやう、艶氣のない、赤熊のやうな、ばさ／＼した、餘るほどあるのを天神に結つて、淺黄の角絞の手絡を弛う大きくかけたが、病氣であらう、弱々とした後姿。見透の裏は小庭もなく、すぐ隣屋の物置で、此處にも葎々と材木が建重ねてあるから、薄暗い中に、鮮麗な其淺黄の手絡と片頬の白いのが、拭込むだ柱に映つて、ト見ると露草が咲いたやうで、果敢なくも綺麗である。

與吉はよくも見ず、通りがかりに、

「今日は、」と、聲を掛けたが、フト引戻さるゝやうにして覗いて見た、心着くと、自分が挨拶し

たつもりの方人はこの人ではない。

四

「居ない。」と呟くが如くにいつて、其ま、通抜けようとする。

ト日があたつて暖たかさうな、明い腰障子の内に、前刻から靜かに水を搔廻す氣勢がして居たが、ばつたりといつて、下駄の音。

「與吉さん、仕事にかい。」

と婀娜たる聲、障子を開けて顔を出した、水色の唐縮緬を引裂いたまゝの襟、玉のやうな腕もあらはに、蜘蛛の囀を絞つた浴衣、帯は占めず、細紐の態で裾を端折つて、布の純白なのを、短かく脛に掛けて甲斐々々しい。

齒を染めた、面長の、目鼻立はつきりとした、眉は落さぬ、束ね髪の中年増、喜藏の女房で、お品といふ。

濡れた手を間近な柳の幹にかけて半身を出した、お品は與吉を見て微笑むた。

土間は一面の日あたりで、盤臺、桶、布巾など、ありつたけのもの皆濡れたのに、薄く陽炎のやうなのが立籠めて、豆腐がどんよりとして沈んだ、新木の太桶の水の色は、薄ら蒼く、柳の影



が映つて居る。

「晩方又來るんだ。」

お品は莞爾しながら、

「難有う存じます、」故と慇懃にいつた。

つか／＼と行懸けた與吉は、これを聞くと、あまり自分の素氣なかつたのに氣がついたか、小戻りして眞顔で、眼を一ツ瞬いて、

「え、毎度難有う存じます。」と、罪のない口の利きやうである。

「ほ、ほ、何をいつてるのさ。」

「何がよ。」

「だつてお前様はお客様ぢやあないかね、お客様なら私ん處の旦那だね、ですから、あの、毎度難有う存じます。」と柳に手を縫つて半身を伸出たまゝ、胸と顔を斜めにして、與吉の顔を差覗く。

與吉は極の悪さうな趣で、

「お客様だつて、あの、私は木挽の小僧だもの。」

と手眞似で見せた、與吉は兩手を突出してぐつと引いた。

「かうやつて、かう挽いてるんだぜ、木挽の小僧だぜ。お前様はおかみさんだらう、柳屋のおか

みさんぢやねえか、それ見ねえ、此方でお辭儀をしなけりやならないんだ。ねえ、」

「あれだ、」とお品は目を睜つて、

「まあ、勿體ないわねえ、私達に何のお前さん……」といひかけて、つく／＼瞻りながら、お品はづつと立つて、與吉に向ひ合ひ、其の禪懸けの綺麗な腕を、兩方大袈裟に振つて見せた。

「かうやつて威張つてお在よ。」

「威張らなくつたつて、何も、威張らなくつたつて構はないから、父爺が魚を食つてくれると可いけれど、」と何と思つたか與吉はうつむいて悄れたのである。

「何うしたんだね、又餘計に悪くなつたの。」と親切にも優しく眉を擡めて聞いた。

「餘計に悪くなつて堪るもんか、此節あ心持が快方だつていふけれど、え、魚氣を食はねえぢやあ、身體が弱るつていふのに、父爺はね、腥いものに箸もつけねえで、豆腐でなくつちやあならねえツていふんだ。え、おかみさん、骨のある豆腐は出來まいか。」と思出したやうに唐突にいつた。



お品は與吉がいふことの餘り突拍子なのを、笑ふよりも先づ驚いたのである。

「ねえ、親方に聞いて見てくんねえ、出来さうなもんだなあ。雁もどきッて、ほら、種々なものが入った油揚げがあらあ、銀杏だの、椎茸だの、あれだ、あの中へ、え、肴を入れて交ぜッこにするてえことあ不可ねえのかなあ。」

「そりや、お前さん。まあ、可いやね、聞いて見て置きませうよ。」

「あ、聞いて見てくんねえ、眞個に肴ッ氣が無くッちやあ、臺なし身體が弱るッていふんだもの。」

「何故父上は、腥をお食りぢやあないのだね。」

與吉の眞面目なのに釣込まれて、笑ふことの出来なかつたお品は、到頭骨のある豆腐の注文を笑はずに聞き濟ました、そして眞顔で尋ねた。

「え、其何だつて、物をこそ言はねえけれど、目もあれば、口もある、それで生白い色をして、蒼いものもあるがね、煮られて皿の中に横になつた姿でえものは、魚々と一口にやあいふけれど、考へて見りやあ生身をぐつぐつ煮着けたのだ、尾頭のあるものの死骸だと思ふと、氣味が悪くッて食べられねえッて、左様いふんだ。」

詰らねえことを父爺いふもんぢやあねえ、山の中の爺婆でも鹽したのを食べるッてよ。

煮たのが、心持が悪けりや、刺身にして食べないかッていふとね、身震をするんだぜ。刺身ッていやあ一寸試だ、鱈にすりやぶつゝ切か、あの又目口のついた天窓へ骨が繋つて肉が絡ひつゝいて残る圖なんでもものは、と厭な顔をするからね。あ、」といつて與吉は頷いた。これは力を入れて對手に其意を得させようとしたのである。

「左様なんかねえ、年紀の故もあらう、一ツは氣分だね、お前さん、そんなに厭がるものを無理に食べさせない方が可いよ、心持を悪くすりや身體のたしにもなんにもならないわねえ。」

「でも瘦せるやうだから心配だもの。氣が着かないやうにして食べさせりや、胸を悪くすることもなからうからなあ、いまの豆腐の何よ。ソレ、」

「骨のあるがんもどきかい、ほ、ほ、ほ、」と笑つた、垢抜けのした顔に鐵漿を含んで美しい。

片頬に觸れた柳の葉先を、お品は其艶やかに黒い前齒で銜へて、扱くやうにして引斷つた。青い葉を、カチ／＼と二ツばかり噛むで手に取つて、掌に載せて見た。トタンに框の取着の柱に凭れた淺黄の手絡が此方を見向く、うら少のと面を合はせた。

其時までは、殆ど自分で何をするかに心着いて居ないやう、無意識の間にして居たらしいが、フト目を留めて、俯向いて、じつと見て、又梢を仰いで、

「與吉さんのいふやうぢやあ、まあ、噫此の葉も痛むこッたらうねえ。」



と微笑んで見せて、少いのが其清い目に留めると、くるりと廻つて、空ざまに手を上げた、お品はすつと立つて、しなやかに柳の幹を叩いたので、蜘蛛の巢の亂れた薄い色の浴衣の袂は、ひらひらと動いた。

與吉は半被の袖を搔合はせて、立つて見て居たが、急に振返つて、

「さうだ。ぢやあ親方に聞いて見ておくんな。可いかい、」

「あ、可いとも、」といつて向直つて、お品は搔潜つて袴を脱した。斜めに袈裟になつて結目がすらりと下る。

「お邪魔申しました。」

「あれだよ。又、」と、莞爾していふ。

「さうだつけな、うむ、此方あお客だぜ。」

與吉は獨で領いたが、背向になつて、腕を張つて、南の字の印が動く、半被の袖をぐツと引いて、手を掉つて、

「おかみさん、大威張だ。」

「あばよ。」

六

「あい、」といひすてに、急足で、與吉は見る内に間近な澁色の橋の上を、黒い半被で渡つた。真中頭で、向岸から駈けて來た郵便脚夫と行合つて、遣違ひに一緒になつたが、分れて橋の兩端へ、脚夫はつかくと間近に來て、與吉は彼の、倒れながらに半ば黄ばんだ銀杏の影に小さくなつた。

七

「郵便！」

「はい、」と柳の下で、洗髪のお品は、手足の眞黒な配達夫が、突當るやうに目の前に踏留まつて棒立になつて喚いたのに、驚いた顔をした。

「更科お柳さん、」

「手前どもでございます。」

お品は受取つて、青い状袋の上書をじつと見ながら、片手を垂れて前垂のさきを抓むで上げつ、素足に穿いた黒緒の下駄を揃へて立つてたが、一寸翻して、裏の名を讀むと、顔の色が動いて、横目に框をすかして、片頬に笑を含んで、堪らないといったやうな聲で、



「柳ちゃん、来たよ！」といふが疾いか、横さまに駆けて入る、柳腰、下駄が脱げて、足の裏が美し。

八

與吉が仕事場の小屋に入ると、例の如く、直ぐ其ま、材木の前に跪いて、鋸の柄に手を懸けた時、配達夫は、此處の前を横切つて、身を斜に、波に揺られて流るゝやうな足取で、走り去つた。與吉は見も遣らず、傍目も觸らないで挽きはじめる。

巨大なる此の樟を濡らさないために、板屋根を葺いた、小屋の高さは十丈もあらう、脚の着いた臺に寄せかけたのが突立つて、殆ど屋根裏に届くばかり。この根際に膝をついて、伸上つては挽き下ろし、伸上つては挽き下ろす、大鋸の齒は上下にあらはれて、両手をかけた與吉の姿は、鋸よりも小さいかのやう。

小屋の中には單こればかりでなく、兩傍に堆く偉大な材木を積んであるが、其の嵩は與吉の丈より高いので、纜に鋸屑の降積つた上に、小さな身體一ツ入れるより他に餘地はない。で恰も材木の穴の底に跪いてるに過ぎないのである。

背後は突抜けの岸で、こゝにも地と一面な水が蒼く澄むで、ひた／＼と小波の敵が絶えず間近う来る。往來傍には又岸に臨むで、果しなく組違へた材木が並べてあるが、二十三十づゝ、四ツ目形に、井筒形に、規律正しく、一定した距離を置いて、何處までも續いて居る、四ツ目の間を、井筒の彼方を、見え隠れに、ちらほら人が通るが、皆黙つて歩いて居るので。

淋い、森とした中に手拍子が揃つて、コツ／＼コツ／＼と、鐵槌の音するのは、この小屋に並んだ、一棟、同一材木納屋の中で、三個の石屋が、石を鑿るのである。

板圍をして、横に長い、屋根の低い、濕つた暗い中で、働いて居るので、三人の石屋も齊しく南屋に雇はれて居るのだけれども、渠等は與吉のやうなものではない、大工と一所に、南屋の普請に懸つて居るので、ちやうど與吉の小屋と往來を隔てた眞向うに、小さな普請小屋が、眞新しい、節穴だらけな、薄板で建つて居る、三方が圍つたばかり、編むで繫いだ繩も見え、一杯の日當で、いきなり土の上へ白木の卓子を一脚据ゑた、其上には大土瓶が一個、茶呑茶碗が七個八個。

後に置いた腰掛臺の上に、一人は匍匐になつて、脇を張つて長々と伸び、一人は横さまに手枕して股引穿いた脚を屈めて、天窗をくつつけ合つて大工が寝そべつて居る。普請小屋と、花崗石の門柱を並べて扉が左右に開いて居る、門内の横手の格子の前に、萌黄に塗つた中に南と白で抜いたポンプが据つて、其縁に釣棹と番とがぶらりと懸つて居る、眞にも静かな、大家の店前に人の氣勢もない。裏庭とおもふあたり、遙か奥の方には、葉のやゝ枯れかゝつた葡萄棚が、影



を倒にうつして、此處もおなじ溜池で、門のあたりから間近な橋へかけて、透間もなく亂杭を打つて、數限もない材木を水のまゝに浸してあるが、彼處へ五本、此處へ六本、流寄つた形が判で印した如く、皆三方から三ツに固つて、水を三角形に區切つた、あたりは廣く、一面に早苗田のやうである。この上を、時々ばら／＼と雀が低う。

九

其他に此處で動いてるものは與吉が鋸に過ぎなかつた。

餘り静かだから、しばらくして、又しばらくして、樟を挽く毎にぼろ／＼と落つる木屑が判然聞える。

(父親は何故魚を食べないのだらう)とおもひながら膝をついて、伸上つて、鋸を手元に引いた。木屑は極めて細かく、極めて軽く、材木の一處から湧くやうになつて、肩にも胸にも膝の上にも降りかゝる。トタンに向うさまに突出して腰を浮かした、鋸の音につれて、又時雨のやうな微な響が、寂寞とした巨材の一方から聞えた。

柄を握つて、挽きおろして、與吉は呼吸をついた。

(左様だ、魚の死骸だ、そして骨が頭に繋がつたまゝ、皿の中に残るのだ、)

と思ひながら、絶えず拍子にかゝつて、伸縮に身體の調子を取つて、手を働かす、鋸が上下して、木屑がまた溢れて来る。

(何故だらう、これは鋸で挽く所爲だ)と考へて、柳の葉が痛むといつたお品の言が胸に浮ぶと、又木屑が胸にかゝつた。

與吉は薄暗い中に居る、材木と、材木を積上げた周圍は、杉の香、松の匂に包まれた穴の底で、目を睜つて、跪いて、鋸を握つて、空さまに仰いで見た。

樟の材木は斜めに立つて、屋根裏を漏れてちら／＼する日光に映つて、言ふべからざる森嚴な趣がある。この見上ぐるばかりな、これほどの丈のある樹はこの邊でつひぞ見た事はない、橋の袂の銀杏は固より、岸の柳は皆短い、土手の松はいふまでもない、遙に見える其梢は殆ど水面と並んで居る。

然も猶これは眞直に眞四角に切たもので、およそ恁る角の材木を得ようといふには、杣が八人五日あまりも懸らねばならぬと聞く。

那な大木のあるのは蓋し深山であらう、幽谷でなければならぬ。殊にこれは飛驒山から廻して來たのであることを聞いて居た。

枝は蔓つて、谷に互り、葉は茂つて峰を蔽ひ、根はたゞ一山を絡つて居たらう。



其時は、其下蔭は矢張こんなに暗かつたが、蒼空に日の照る時も、と然う思つて、根際に居た黒い半被を被た、可愛い顔の、小さな蟻のやうなものが、偉大なる材木を仰いだ時は、手足を縮めてぞつとしたが、

(父親は何うして居るだらう)と考へついた。

鋸は又動いて、

(左様だ、今頃は彌六親仁がいつもの通、筏を流して来て、あの、船の傍を漕いで通りすがりに、父上に聲をかけてくれる時分だ)

と思はず振向いて池の方、うしろの水を見返つた。

溜池の真中あたりを、頬冠した、色のあせた半被を着た、脊の低い親仁が、腰を曲げ、足を突張つて、長い棹を繰つて、晝の如く漕いで来る、筏は恰も人を乗せて、油の上を迂るやう。

するくくと向うへ流れて、横ざまに近づいた、細い黒い毛脛を掠めて、蒼い水の上を鷗が弓形に大きく鮮かに飛んだ。

十

「與太坊、父爺は何事もねえよ。」と、池の真中から聲を懸けて、おやぢは小屋の中を覗かうとも

せず、爪さきは小波を浴ぶるばかり沈むだ筏を棹さして、此時また中空から白い翼を翻して、ひらりと落ちて来て、水に姿を宿したと思ふと、向うへ飛んで、鷗の去つた方へ、すらりと流して行く。

これは彌六といつて、與吉の父翁が年来の友達で、孝行な兒が仕事をしながら、病人を案じて居るのを知つて居るから、例として毎日今時分通りがかりに其消息を傳へるのである。與吉は安堵して又仕事にかゝつた。

(父親は何事もないが、何故魚を喰べないのだらう。左様だ、刺身は一寸だめしで、鱈はぶつぶつ切だ、魚の煮たのは、食べると肉がからみついたま、頭に繋つて、骨が残る、彼の皿の中の死骸に何うして箸がつけられようといつて身震をする、まつたくだ。そして魚ばかりではない、柳の葉も食切ると痛むのだ)と思ひく、又この偉大なる樟の殆ど神聖に感じらる、ばかりな巨材を仰ぐ。

高い屋根は、森閑として日中薄暗い中に、ほのくくと見える材木から又ばらりと、ばらりと、其處ともなく、鋸の屑が溢れて落ちるのを、思はず耳を澄まして聞いた。中央の木目から渦いて出るのが、池の小波のひたりと寄する音の中に、隣の納屋の石を切る響に交つて、繁つた葉と葉が擦合ふやうで、たとへば時雨の降るやうで、又無数の山蟻が谷の中を歩行く蹙音のやう



である。

與吉はとみかうみて、肩のあたり、胸のあたり、膝の上、跪いてる足の間に落溜つた、堆い、木屑の積つたのを、樟の血でないかと思つてゾツとした。

今まで其上について暖だつた膝頭が冷々とする、身體が濡れはせぬかと疑つて、彼處此處袖襟を手で拵いて見た。仕事最中、こんな心持のしたことは始めてである。

與吉は、一人谷のドン底に居るやうで、心細くなつたから、見透かす如く日の光を仰いだ。薄い光線が屋根板の合目から洩れて、幽かに樟に映つたが、巨大なるこの材木は唯單に三尺角のみのものではなかつた。

與吉は天目を蔽ふ、葉の茂つた五抱もあらうといふ幹に注連繩を張つた樟の大樹の根に、恰も山の端と思ふ處に、しつきりなく降りかゝる翠の葉の中に、落ちて落ち重なる葉の上に、あたりは眞暗な處に、蟲よりも小な身體で、この大木の恰も其の注連繩の下あたりに鋸を突さして居るのに心着いて、恍惚として目を睜つたが、氣が遠くなるやうだから、鋸を抜かうとすると、支へて、堅く食入つて、微かにも動かぬので、はツと思ふと、谷々、峰々、一陣轟！と渡る風の音に吃驚して、數千仞の谷底へ、眞倒に落ちたと思つて、小屋の中から轉がり出した。

「大變だ、大變だ。」

「あれ！ お聞き、」と涙聲で、枕も上らぬ寢床の上の露草の、がツくりとして仰向けの淋い素顔に紅を含んだ、白い頬に、蒼みのさした、うつくしい、妹の、ばさ／＼した天神鬚の崩れたのに、淺黄の手絡が解けかゝつて、透通るやうに眞白で細い頸を、膝の上に抱いて、抱占めながら、頬摺していつた。お品が片手にはしつかりと前刻の手紙を握つて居る。

「ねえ、ねえ、お聞きよ、あれ、柳ちゃん——柳ちゃん——しつかりおし。お手紙にも、そこらの材木に枝葉がさかえるやうなことがあつたら、夫婦に成つて遣るツて書いてあるぢやあないか。親の爲だつて、何だつて、一旦他の人にお任せだもの、道理だよ。お前、お前、それで氣を落したんだけれど、命をかけて願つたものを、お前、其までに思ふものを、柳ちゃん、何だつてお見捨てなさるものかね、解つたかい、あれ、あれをお聞きよ。もう可いよ。大丈夫だよ。願は叶つたよ。」

「大變だ、大變だ、材木が化けたんだぜ、小屋の材木に葉が茂つた、大變だ、枝が出来た。」

と普請小屋、材木納屋の前で呼び足らず、與吉は狂氣の如く大聲で、此家の前をも呼はつて歩行いたのである。

「ね、ね、柳ちゃん——柳ちゃん——」



うつとりと、目を開いて、ハヤ色の褪せた唇に微笑むで頷いた。人に血を吸はれたあはれな者の、將に死なんとする耳に、與吉は福音を傳へたのである、この與吉のやうなものでなければ、實際また憚る福音は傳へられなかつたのであらう。

三尺角拾遺 (木精)



「あなた、冷えやしませんか。」

お柳は暗夜の中に悄然と立つて、池に臨むで、其の肩を並べたのである。工學士は、井桁に組んだ材木の下なる端へ、窮屈に腰を懸けたが、口元に近々と吸つた巻煙草が燃えて、其若々しい横顔と帽子の鍔廣な裏とを照らした。

お柳は男の背に手をのせて、弱いものいひながら遠慮氣なく、

「あら、しつとりしてるわ、夜露が酷いんだよ。直にそんなものに腰を掛けて、あなた冷いでせう。眞とに養生深い方が、其に御病氣舉句だといふし、悪いわねえ。」

と言つて、そつと壓へるやうにして、

「何ともありませんか、又ぶり返すと不可ませんわ、金さん。」

其でも、ものをいはなかつた。

「眞とに毒ですよ、冷えると悪いから立つていらつしやい、立つていらつしやいよ。其方が増ですよ。」

といひかけて、あどけない聲で幽に笑つた。

「ほ、遠い處を引張つて来て、草臥れたでせう。濟みませんねえ。あなたも厭だといふし、其に私も、そりや様子を知つて居て、一所に苦勞をして呉れたからツたつても、姉さんには極が悪くツて、内へお連れ申すわけには行かないしさ。我儘ばかり、お寝つて在らつしやつたのを、こんな處まで連れて来て置いて、坐つてお休みなさることさへ出来ないんだよ。」

お柳はいひかけて涙ぐんだやうだつたが、しばらくすると、

「さあ、これでもお敷きなさい、些少はたしになりますよ。さあ、」

擦寄つた氣勢である。

「袖か、」

「お厭?」

「そんな事を、しなくツても可い。」

「可かありませんよ、冷えるもの。」

「可いよ。」

「あれ、情が強いねえ、さあ、え、ま、瘦せてる癖に。」と向うへ突いた、男の身が浮いた下へ、片袖を敷かせると、まくれた白い腕を、膝に絶つて、お柳は吻と呼吸。

男はちつとして動かず、二人ともしばらく黙然。



「やがてお柳の手がしなやかに曲つて、男の手に觸れると、胸のあたりに持つて居た巻煙草は、心するともなく、放れて、婦人に渡つた。

「もう私は死ぬ處だつたの。又笑ふでせうけれども、七日ばかり何にも鹽ツ氣のものは頂かないんですもの、斯うやつてお目に懸りたいと思つて、煙草も斷つて居たんですよ。何だつて一旦汚した身體ですから、そりやおつしやらないでも、私の方で氣が怯けます。其にあなたも舊と違つて、今のやうな御身分でせう、所詮叶はないと斷めても、斷められないもんですから、あなた笑つちや厭ですよ。」

「といひ淀んで一寸男の顔。」

「斷めのつくやうに、斷めさして下さいって、お願い申した、あの、お返事を、夜の目も寝ないで待つてますと、前刻下すつたのが、あれ……ね。」

深川の此の木場の材木に葉が繁つたら、夫婦になつて遣るつておつしやつたのね。何うしたつて出来さうもないことが出来たのは、私の念が届いたんですよ。あなた、こんなと思ふもの、其位なことはありますよ。」

と猶しめやかに、

「ですから、最う大威張。其でなくつてはお聲だつて聞くことの出来ないので、押懸けて行つて、

無理に其の材木に葉の繁つた處をお目に懸けようと思つて連出して來たんです。

あなた分つたでせう、今あの木挽小屋の前を通つて見たでせう。疑ふもんぢやありませんよ。人の思ですわ、眞暗だから分らないつてお疑んなさるの、そりや、あなたが邪慳だから、邪慳な方にや分りません。」

又黙つて俯向いた、しばらくすると顔を上げて斜めに巻煙草を差寄せて、

「あい。」

「……………」

「さあ、」

「……………」

「邪慳だねえ。」

「……………」

「え、！、要らなきや止せ。」

といふが疾いか、ケンドンに投げ出した、巻煙草の火は、ツツツと楕圓形に長く中空に流星の如き尾を引いたが、燐と火花が散つて、蒼くして黒き水の上へ亂れて落ちた。屹と見て、



「お柳、」

「え、」

「およそ世の中にお前位なことを、私にするものはない。」  
と重々しく且つ沈んだ調子で、男は肅然としていつた。

「女房ですから、」

と立派に言ひ放ち、お柳は忽ち震ひつくやうに、岸破と男の膝に頬をつけたが、消入りさうな風采で、

「そして同年紀だもの。」

男は其頸を抱かうとしたが、フト目を反らす水の面、一點の火は未だ消えないで残つて居たので。驚いて、じつと見れば、お柳が投げた巻煙草の其ではなく、霧か、霧か、朦朧とした、灰色の溜池に、色も稍濃く、筏が見えて、天窓の圓い小な形が一個乗つて蹲むで居たが、煙管を啣へたらうと思はれる、火の光が、ぼつちり。

又水の上を歩行いて来たものがある。が船に居るでもなく、裾が水について居るでもない。脊高く、霧と同鼠の薄い法衣のやうなものを絡つて、向の岸からひら／＼と。

見る間に水を離れて、すれ違つて、背後なる木納屋に立てかけた數百本の材木の中に消えた、

トタンに認めたのは、緑青で塗つたやうな面、目の光る、口の尖つた、手足は枯木のやうな異人であつた。

「お柳。」と呼ぼうとしたけれども、工學士は餘りのことに聲が出なくつて瞳を据ゑた。

爾時何事とも知れず仄かにあかりがさし、池を隔てた、堤防の上の、松と松との間に、すつと立つたのが婦人の形、ト思ふと細長い手を出し、此方の岸を氣だるげに指招く。

學士が堪まりかねて立たうとする足許に、船が横ざまに、ひたとついて居た、爪先の乗るほどの處にあつたのを、霧が深い所爲で知らなかつたのであらう、單そればかりでない。

船の洞の室に嬰兒が一人、黄色い裏をつけた、紅の四ツ身を着たのが迂つて、彼の婦人の招くにつれて、船ごと引きつけらるゝやうに、水の上をす／＼と斜めに行く。

其道筋に、夥しく沈めたる材木は、恰も手を以て搔き退ける如くに、算を亂して颯と左右に分れたのである。

其が向う岸へ着いたと思ふと、四邊また濛々、空の色が少し赤味を帯びて、殊に黒ずんだ水面に、五六人の氣勢がする、囁くのが聞えた。

「お柳。」と思はず抱占めた時は、淺黄の手絡と、雪なす頸が、鮮やかに、狭霧の中に描かれたが、見る／＼、色があせて、薄くなつて、ぼんやりして、一體に墨のやうになつて、やがて、幻は手



にも留らず。

放して退ると、別に塀際に、犇々と材木の筋が立つて並ぶ中に、朧々ともものこそあれ、學士は自分の影だらうと思つたが、月は無し、且つ我が足は地に釘づけになつてゐるのにも係らず、影法師は、薄くなり、濃くなり、薄くなり、薄くなり、ふら／＼動くから我にもあらず、

「お柳、」

思はず又、

「お柳、」

といつてすた／＼と十間ばかりあとを追つた。

「待て。」

あでやかな顔は目前に歴々と見えて、ニツと笑ふ涼い目の、うるんだ露も手に取るばかり、手を取らうする、と何にもない。掌に障つたのは寒い旭の光線で、夜はほの／＼と明けたのであつた。

學士は昨夜、礫川なる其邸で、確に寢床に入つたことを知つて、あとは恰も夢のやう。今を現とも覺えず。唯見れば池のふちなる濡れ土を、五六寸離れて立つ霧の中に、唱名の聲、鈴の音、深川木場のお柳が姉の門に紛れはない。然も面を打つ一脈の線香の香に、學士はハツと我に返つ

た。何も彼も忘れ果てて、狂氣の如く、其家を音信れて聞くと、お柳は丁ど爾時……。あはれ、草木も、婦人も、靈魂に姿があるのか。



昭和十六年三月十日印刷  
昭和十六年三月十五日發行

鏡花全集第四卷

(寺島製本)

著者

泉鏡太郎いづみ かがやき とうろう

發行者

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地  
岩波茂雄

印刷者

東京市下谷區二長町一番地  
井上源之丞

印刷所

東京市下谷區二長町一番地  
凸版印刷株式會社

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行所 岩波書店

電話(33)一八七・一八八番  
九段(33)一八九・一八〇番  
振替口座東京七四四一六番

小冊出版中、蓋不完全な品(落丁・割丁)等がありました。御手数から洩れなく御申出下さる事を御願ひ致します。たとへ御讀後でありましたも、早速お取替致します。







798  
167



